平成28年度

のじぎく文芸賞

2016 Literary Works

公益財団法人兵庫県人権啓発協会設立25周年記念

兵庫県・公益財団法人兵庫県人権啓発協会

発刊にあたって

県民の皆さまに主体的に人権について考え、作品づくりをとおして豊かな人権感覚を身につけていただくために実施してきた「のじぎく文芸賞」も、今年度で第二十三回を迎えました。第一回(平成六年度)の応募作品は九十二編。二十三回目となる本年度は、一二七六編のご応募をいただき、この二十三年間での応募総数は一五七七三編となります。県民の皆さまの人権問題への関心が高まり広がってきたことを改めて実感せずにはいられません。

この二十三年の間に、少子・高齢化や情報化の急速な進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化してまいりました。子どもや高齢者への虐待、いじめ、体罰、職場におけるセクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事件などの人権侵害は後を絶ちません。また、被災された人たちなど様々な人権にかかる課題もあります。さらに家族や地域、職場等での人と人とのつながりや支え合いが薄れる「無縁社会」と呼ばれる状況の拡大も大きな問題となっています。

兵庫県では、私たち一人ひとりがお互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活の中で人権尊重を自然に態度や行動として表すことが文化として定着している社会をめざして、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに展開しているところであり、「のじぎく文芸賞」も、その取り組みの一つです。人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られ、人権課題の解決に向けて明るい展望が描かれた数々の作品が、ひょうご人権ジャーナル「きずな」や市町の人権啓発冊子に掲載されたり、ラジオで放送されるなど、広く人権啓発に活用されてまいりました。

このささやかな冊子には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞八編を収録いたしました。人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、公益財団法人兵庫県人権啓発協会も今年で設立二十五周年を迎えました。今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみなさまの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますのでどうぞよろしくお願いいたします。

平成二十八年十二月

兵　庫　県
公益財団法人兵庫県人権啓発協会

平成28年度　人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

	氏名	作品名	部門（部）
〈最優秀賞〉	上松敏治	うちの子に障害はない！	小説（一般）
	塚口佳子	新たなる、この温もりの中で	随想（一般）
	内藤廉哉	輝け	詩（学齢児童生徒）
	阿部智美	真実	創作童話（一般）
〈優秀賞〉	阿部忠彦	河上直子、二十二歳、新任	小説（一般）
	織田香音	いま、伝えたいことがある。	小説（学齢児童生徒）
	東森美恵子	優しさをつないで	随想（一般）
	森本紗英	よりよい社会にするには	随想（学齢児童生徒）
	尾崎順子	夕焼け	詩（一般）
	森本宝乃実	大丈夫のリボン	詩（学齢児童生徒）
	森園順子	ごめんがいっぱいと、大きなありがとうが一つ	創作童話（一般）
	鈴木聖生	心の国のかけ橋	創作童話（学齢児童生徒）

〈佳　作〉

愛川　弘	髭	小説（一般）
小倉彩乃	ふたりの母	小説（一般）
中村　宏	アラフォー日誌―明日は好天	小説（一般）
田中幸典	気分はタイガーマスク	随想（一般）
立花公子	母の小さな愛の種は…	随想（一般）
近江田　隆	人権問題を再考する	随想（学齢児童生徒）
明石真美	相手のことを考えて	随想（学齢児童生徒）
出田俊介	ぼくはいいこだ!!	随想（学齢児童生徒）
黒田紀子	あなたも種	詩（一般）
松末真理子	初めて見た空	詩（一般）
大喜多智子	桜まつりに会いましょう	創作童話（一般）
岩本珠寧	しいの心の車いす	創作童話（一般）
藤本　忍	友達	創作童話（一般）
田口陵海	「少女」と「努力」	創作童話（学齢児童生徒）
櫻井香織	ゴキブリ	創作童話（学齢児童生徒）

目次

【総評】……審査委員長……1
【部門別審査講評】……各審査委員……2
【最優秀賞・優秀賞作品】
《最優秀賞》
〈小説部門〉うちの子に障害はない！……上松敏治……19
〈随想部門〉新たなる、この温もりの中で……塚口佳子……33
〈詩　部門〉輝け……内藤廉哉……39
〈創作童話部門〉真実……阿部智美……41

《優秀賞》

〈小説部門〉
（一般の部）
河上直子、二十二歳、新任 …… 阿部忠彦 …… 47
（学齢児童生徒の部）
いま、伝えたいことがある。 …… 織田香音 …… 63

〈随想部門〉
（一般の部）
優しさをつないで …… 東森美恵子 …… 75
（学齢児童生徒の部）
よりよい社会にするには …… 森本紗英 …… 79

〈詩　部門〉
（一般の部）
夕焼け …… 尾崎順子 …… 81
（学齢児童生徒の部）
大丈夫のリボン …… 森本宝乃実 …… 83

〈創作童話部門〉
（一般の部）
ごめんがいっぱいと、大きなありがとうが一つ … 森園順子 …… 85
（学齢児童生徒の部）
心の国のかけ橋 …… 鈴木聖生 …… 91

◆平成28年度応募作品の内訳

部門 ＼ 部	一般（高校生以上）	学齢児童生徒（中学生以下）	合計
小説	29	2	31
随想	34	912	946
詩	30	248	278
創作童話	15	6	21
応募総数	108	1168	1276

◆平成28年度審査委員

古山　桂子（総　括）　　野元　　正（小　説）　　三浦　暁子（随　想）

時里　二郎（　詩　）　　尾崎　美紀（創作童話）

総評

審査委員長　古山　桂子

大変残念なことですが、いじめや差別など人権に関する問題はいまだにあとを絶ちません。その中でもこの夏に神奈川県相模原市で起きた障害者施設殺傷事件は、私たちに大きなショックを与えました。ネットには容疑者をたたえる書き込みもあったとのこと、暗澹たる思いを抱いた方も多かったのではないでしょうか。

そんななかでの今年の「のじぎく文芸賞」でした。私は寄せられた小説、随想、詩、創作童話の4部門を読み、心にほっこりぬくもりを頂いたようで、本当に救われた思いがしました。作品を寄せてくださった皆さんに感謝しています。

率直で、真摯で、和やかで、子共らしくて…。いろいろな形容はありますが、通底しているのは、人間だけでなく動物にも植物にも、自分を取り巻くすべてに向けた優しさです。

作品を一点一点読み進むうちに、引き込まれて時間を忘れていました。これが筆力というものでしょう。人権問題はそのまま文章にすると、文芸にはなりがたいものです。理屈で差別はダメといっても、それは頭だけ。読む側が引き込まれるのは、その書き手の日頃の思い、体験などを総合した人間力によるとでもいえましょうか。

今年度の入選者の最年長は88歳、最年少は小学2年生のお2人でした。88歳の方の随想はタッチが若々しく、小2の方は幼いながらにしっかりと考えをまとめているのに感心しました。将来が楽しみです。学齢児童生徒の部では、家庭教育の大切さを感じさせられたことでした。

ひとつひとつの作品については、部門別の審査委員がお書きになった評をご覧下さい。

この冊子がたくさんの方たちの目に触れ、さまざまな話し合いの場ができ、人権問題を考える上での材料にして頂けますよう期待しております。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員　野元　正

《審査総評》

今年度の小説部門の応募総数は、31編（一般の部29編、学齢児童生徒の部2編）であった。平成27年度の応募総数26編（一般21編、学齢児童生徒5編、）と比較すると、若干増加している。嬉しいことだ。それに、作品の熟度は年ごとに上がっているように思えてならない。テーマは「いじめ」「友情」「障害者の家族」「複雑な家庭環境」「動物愛護」「風評被害」「差別」「思いやりと心遣い」など多岐にわたる。

文学を通じて「人権」の大切さを現代社会の人々に伝えることは非常にむずかしいことだが、「人権」とは何か？　とむずかしく考えるのでなく、作品を読むことで、自然と何かを、感じる作品や、また将来に向かって光明を感じさせる作品に焦点を当ててみた。

〈最優秀賞〉

作品名「うちの子に障害はない！」　上松　敏治

愛する息子を「アスペルガー症候群」と診断された父親「私」が妻をはじめ、孫を見つめるそれぞれの両親とともに、やがて妻と一緒に心の置きどころを見つけるまでの苦悩、特に心の動きが、巧みに書き込まれている。

小説として、「障害」とは何か？　を考えさせる背景や他の人の考え方もきっちりと反映されていて、読者が読後に自然に考えを深めることのできる秀逸な作品だと思う。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「河上直子、二十二歳、新任」　阿部　忠彦

阪神・淡路大震災で両親を失い、祖父母に育てられた主人公「直子」が、自分だけ救われた大切な命を生かすため神戸で両親と同じ教職に就く。

担任の小学3年の男子が、母と内縁の男との複雑な家庭の淋しさや悲哀を紛らわすためか、起こした万引きや家出事件や、またよくある話だが、クラス一番の暴れん坊・正が、母の再婚相手の義父から受けたドメスティック・バイオレンスなどに関わることを通じて、成長していく心の移ろいや行動の過程を明るく巧みに描いて読ませる、佳篇だと思う。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「いま、伝えたいことがある。」　織田　香音

幼稚園のころからあやちゃんは私（ひな）を何かと庇ってくれ、親友を誓い合う仲だった。しかし、ある放課後の公園で、同級生のみうとかおりのあやちゃんへの悪口に、曖昧な返事をして私は自分を取り繕う。それをあやちゃんに聞かれたしまう。素直に弁解も詫びもできない私は「卑怯な私」と思い悩む。次の日からあやちゃんへのイジメが始まった。クラスのみんなも私も見て見ぬふり。私は自己嫌悪に陥る。あやちゃんが私のため喧嘩した東君の忠告で目覚めた私はあやちゃんに本心を伝える決心をする。その矢先、私はいじめのとばっちりでみうに頬を叩かれる。事情を知った担任は、あやちゃんに謝り、私と彼女も互いの友情を再度確かめ合う。「いじめ」「友情」「勇気」「見て見ぬふり」など現代の病巣を浮き彫りにした秀作だと思う。

〈佳作〉

作品名「髭」　愛川　弘

低いが険しい山に毎日登山する老人たちにとって、山の野犬を統率する髭が立派なことから名付けられた雌犬「髭」は、アイドルであった。山にはどう猛な猪がいて、髭は野犬を率いて挑み、時々瀕死の重傷を負っているのが、目撃された。髭には二匹の雄の子犬が居た。あるとき、髭はどうにか逃れたが、仲間の野犬は市民の通報で野犬狩りに遇い、髭は独りになった。この作品は「野生動物への思いやり」「飼っていた動物をもてあますと捨てる人間の身勝手さ」「高齢者の生きがい」など大きな社会問題を内包し、提示した読み応えのある作品だと思う。最後に猪の罠にかかった髭の最期は哀れであり、人間の身勝手さの表徴だ。文章、構成、語り口も良好な作品だ。

作品名「ふたりの母」　小倉　彩乃

表題から主人公「私」の母が二人というありきたりな話かと思ったが、実祖母と義祖母という珍しい題材の小説だった。血のつながっていない祖母の曇りない真実の愛情をどう受け止めるか、そして血がつながっていないのに心から、母を子として、私を孫として真実愛している義祖母の生き方が巧みに描かれた心温まる佳篇だと思う。

作品名「アラフォー日誌―明日は好天」　中村　宏

病院の受付のパートをしているさっちゃんのママ（私）日記の形式で書かれた構成に妙がある作品だ。さっちゃんの友だち、ヨナちゃんのママの老人ホーム窃盗犯の濡れ衣風評、ヨナちゃんの家の生活保護の守秘に悩む私、ヨナちゃんの生活保護家庭の告白、クラスの男の子たちの生活保護家庭ゆえのヨナちゃんいじめ、ヨナちゃんのママの離婚、滞る養育費などの告白、ヨナちゃんの家の

家計は生活保護が主体でなく、ママのヘルパーが主収入、歌のうまいヨナちゃん抜きの「ヨナ抜き音楽祭」の誤解（ヨナ抜きとは、４番目のファと７番目のシを使わない昭和10年代や30年代の歌のこと）の氷塊、ヨナちゃんの転校など、そして戸配商品紛失風評の真相の判明や老人ホーム窃盗犯の逮捕から、ヨナちゃん家族への世間のとらえ方も変化していく様子などが巧みに書かれている。

【随想部門】

審査委員　三浦　暁子

《審査総評》

本年度、のじぎく文芸賞の随想部門への応募は946作品であった。

そのうち、一般の部が34作品、学齢児童生徒の部が912作品である。

学齢児童生徒の部への応募が多数寄せられたことを頼もしく嬉しく思うと同時に指導された先生方の努力の賜であると感じ、有り難いことだと思っている。

自分の考えをまとめ、文章にすることを楽しいと感じる方が増えることは、人間として、生き方の技を磨くことになると、私は信じている。今年はオリンピック・パラリンピックが開催されたこともあり、スポーツの中で人権を考えようとする作品も多かった。

毎日、少しずつでも、目の前に広がる事象を文章にしていくと、新しい自分になれると信じて、励んでいただきたい。

〈最優秀賞〉

作品名「新たなる、この温もりの中で」　　塚口　佳子

愛する家族が認知症やアルツハイマー病になったとき、周囲はどうしようもない絶望にとらわれる。私自身も経験したことがあるが、「いつかはあること」と、覚悟していたはずなのに、実際には、「うちは大丈夫だろう」と、意味のない楽観をしていた覚えがある。

この作品の作者は、夫が若年性アルツハイマーと診断されて、7年になる。

その間の、驚き、悲しみ、そして、やらねばならない数々の出来事を抱えた毎日を正直に誠実にこれまでも書いてこられた。そして、今、ご主人は介護付き老人ホームで穏やかに過ごされている

という。的確な文章を用い、愛があふれる毎日を綴ったこの作品はこれから家族の介護に直面する人にとっても、ひとつの救いを示すものだと思う。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「優しさをつないで」　東森　美恵子

認知症カフェでボランティアスタッフとして働く作者。最初は、引き受けるべきか、自分にできるのだろうかと迷ったというが、そんな作者の背中を押したのは、92歳の高齢ながら、一人暮らしをしている母親の「何でもやってみんとわからんじゃろ」の言葉だった。

母の言葉に嘘はなかった。作者はやってみなければわからなかった数々の新しい出来事に出会うからだ。認知症カフェと言っても、やってくるのは、介護をしている人、引きこもりの子どものいるお母さんなど、バラエティに富んでいる。皆が心に鬱屈を抱え、思いをはき出して、少し身軽になって帰って行く。そこはスタッフの心も浄化する希有な場所であったのだ。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「よりよい社会にするには」　森本　紗英

人間は何事からも学べるということを実感させてくれる作品である。

妹が病院で検査を受けることになり、母親と付き添った作者。「行ったらいろんな経験できるから、一緒に行こう」という母の言葉は、現実のものとなった。

車いすや高齢者の人のためにあるノン・ステップバス、点字ブロックなどに興味を持ったのも、病院に行ったことがきっかけとなった。いつもとはちょっと違う日常から学ぶことがいかに大切かを実感させる作品だった。

〈佳作〉

作品名「気分はタイガーマスク」　田中　幸典

他人のために何かをしたい。そう思っている人は多いだろう。しかし、実際に何ができるかというと、忙しい毎日の生活にとりまぎれてしまう。作者も「里親募集」の記事を見て、自分にも何かできるのではないかと思う。しかし、荷が重いかなと尻込みもしたくなる。

正直で照れ屋な彼は、自分のように無責任で気楽な私には、荷が重いなと感じてしまうからだ。けれども、作者は考える。間接的になら自分にもできることがある、と。

そして、活動資金の援助をマイペースで続けることにするのだ。

熱心で激しい活動の仕方もある。しかし、細く長く、誠実な作者の態度に学ぶべき点は多い。人が支え合うことに制限はなく、継続は力となると教えてもらったような気がする。

作品名「母の小さな愛の種は…」　立花　公子

田舎で暮らす姉からの電話。体調を崩している作者へのねぎらいの言葉だった。

「無理をしてお盆に帰ってこなくていいよ。秋でいいよ」と。

母の世話をして、死を看取り、今も命日にはぼたもちをそなえている姉。

そんな姉だが、秘密があった。姉は母の実子ではないというのだ。子供のころ、それを知ってしまった姉の動揺、悲しみ、そして、怒り。しかし、母の愛は姉妹をつつみこみ、分け隔てなくかわいがって、そして、逝った。その見事な一生を受け継いだのは、姉だったのかもしれない。

〈佳作〉

作品名「人権問題を再考する」　近江田　隆

人権問題という難しく、しかし、考えないではいられない問題に必死にとりくむ作者の姿が目に浮かんでくる作品である。小学生の頃、同級生に、考えたり文字を書くのが苦手な友達がいた。時には周囲にからかわれているその子を救うにはどうしたらいいのか？中学生になった今、作者は改めて考えてみるべきだと思い、解決策について思いを巡らす。その結果、固定観念というものから、自由にならない限り、みんなが共存できる空間を作ることはできないという結論に至る。

物事を様々な面からみてみることによって、自分を変えるという方法は、意味のある解決策となるだろう。

作品名「相手のことを考えて」　明石　真美

相模原市の高齢者施設で起きた陰惨な事件。かつてそこで働いていたスタッフが引き起こしたというニュースを知ったとき、多くの人の頭に浮かんだのは「なぜ？」という疑問だったろう。作者は小学校の4年生ながら、自分でその理由を突き止めたいと願う。

インターネットの書き込みにも疑問を持ち、驚きながらも、「人権」という言葉の意味を考えるため国語辞典で調べている。うちひしがれることなく、まじめに取り組む姿勢に希望を感じた。

作品名「ぼくはいいこだ‼」　出田　俊介

お兄ちゃんとして、いつも叱られてばかりの作者。

小さな妹をかばわなければと思いつつも、時々、腹が立って泣かせてしまう作者。

そんな彼が、「いつもそう！」とふてくされながらも、兄であろうとするいじらしさが感じられる。

テンポのいい文章にも感心した。

【詩部門】

審査委員　時里　二郎

《審査総評》

今年度も、いのちの大切さ、家族や人と人との絆について、また戦争の体験から学ぶ作品など、多彩な作品が集まりました。人権意識の広がりと深まりは確かに実感として伝わってきます。

ただ、それを詩というかたちで表現しようとするときに心得ておきたいのは、体験や経験を通して紡がれた言葉は、強く人の心を打ち、人の心の奥深くまで染みわたっていくということです。言葉はもともと記号の一種とでも言うべきものなので、どうしても頭の中の思考と結びつきやすい性質があります。応募作品のなかでも、自分の経験や体験によらず、ただ頭の中で考えたことを言葉にしている作品が多くありましたが、主張していることは人権の大切さだということはよくわかるのですが、それが深く読み手の心に届いてこないのです。特に児童生徒の作品に多かったのが気になります。まず、自分の心に残った体験や経験から書き起こすということを心がけてください。作品のなかに描かれた人の息づかいやしぐさがありありと伝わってくれば、おのずと、そこに共感が生まれ、読み手の心を動かすことになるのではないでしょうか。

〈最優秀賞〉

作品名「輝け」　内藤　廉哉

その日から勉強も部活もやる気が出ず、食欲もない。「見慣れた景色がいつもと違って見えた。」おそらくそうさせた原因が何かあったのでしょう。作者はそれに気づかないのではありません。あえて詩では触れていないのです。

中学二年生の作者のこころは感受性が強く、外側の世界に敏感に反応します。その感受性の強さ

が、同時に生きる力を引き寄せるのです。ふと、ほたるを見たくなって、近所の川に行く。「暗闇の中に小さな光が一つ二つ」。その命の輝きに共感するように、「ぼくの命」も輝きだします。「無性に走りたくなった／川沿いを走るぼくの額に汗がにじむ」。「笑うことも」できなくなっていた彼のこころが、単純な経緯をたどって解決したのではなかったでしょう。いろいろと悩んだり、様々な葛藤があったに違いありません。そういう時間の経過が、「輝け」という表題に表れています。蛍へのエールである以上に、自分に対する励ましであり、鼓舞なのです。その彼の息遣いまでも感じられる「輝け」という一語に込められた強い思いが、そのまま彼の通ってきた苦しみの深さの裏返しのように思えてなりません。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「夕焼け」　尾崎　順子

沖縄に修学旅行に行った生徒に一番の思い出を聞くと、「夕焼け」だと言う。首里城でも美ら海水族館でもなく、彼の自宅から毎日眺められるはずの夕陽だというのです。

家と学校と施設を毎日行ったり来たりしてきた彼にとっての夕焼けは「送迎車の遮光ガラスにうつる／いちまいの赤黒い空やったんや」

作者はその言葉に胸を突かれます。生徒に身近に接していたにも関わらず、彼の思いに気づかなかったことに強い悔いを感じます。「夕焼けが／あんなにでっかくて／あんなに赤かったなんて／知らへんかったよ」「おれは夕焼けに／車椅子ごと吸い込まれていったんや」「十五年かけて／最高の夕焼けに　出合ったんや」

あたりまえのことが、「あたりまえ」でないこと。奪われたり、失われたりした「あたりまえ」のことを取り戻すことがどんなにたいへんでも、どんなに大切なことか、ということ。「あたりまえ」

のことは、人に「寄り添う」ことによって初めて見えてくるということ。
「人に寄り添う」ということ。とりわけ、社会的な立場の弱い人に寄り添うことの意味をこの詩は教えてくれます。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）
作品名「大丈夫のリボン」　森本　宝乃実
この詩のよさは、なんと言っても作者の声が明るく元気に読み手に伝わってくることです。そして、作者の優しさや思いやりの気持ちが、あふれるように言葉に満ちているところ。内容は具体的な体験に基づいたものではないのですが、おそらく、実際に作者は、友達が泣いている時には「大丈夫？」と声をかけ、おとうさんがつかれている時にも「大丈夫？」と心配の言葉をかけているに違いありません。さまざまな色のリボンを使いわけて、おしまいは、たくさんリボンを使ったからと心配していると、おかあさんが「大丈夫」と言って、心のリボンを足してくれる。詩の組み立ても、うまく考えられていて、詩としてもすばらしいと思いました。小学校二年生の優しさに励まされるいい作品です。

〈佳作〉
作品名「あなたも種」　黒田　紀子
ふうせんかずらの種を見つめて、その不思議なかたちに思いをはせる。そこから「命」にまで思いがおのずと動いていきます。さらに、その種の命が、人の命へと繋げられていきます。
人の命は、しかし、ふうせんかずらのそれとは違います。どこが違うのか。「いつ、花が咲くのか／どんな実がなるのか／わからない」こと。もう一つあります。「初めに持っていた種の／姿は、い

つでも変わる／変われるのだ」ということ。そうして、「あなただけの花や実を／つけてとんでゆく」。

人の命がなぜ尊く大切なのか。作者ははっきりと、それはひとりひとりが違う花や実をつけるからであり、それらの成長の仕方やその時間も、ひとりひとり違うからだと答えています。

作品名「初めて見た空」　松末　真理子

優秀賞の『夕焼け』と似たモティーフの詩です。「いくら手伝ってもらっても／視線が違うんだ。」十五歳の車椅子の少年が、アメリカに行き、日本にはない空気感を感じる。「当たり前に対等な価値ある人間としてヘルプが提供される」。

そういう空気感を、肌で感じた彼は、空を見つめて「こんな空を、見たことがなかった。」感動を込めた思いをそう表現しています。それは「どんな人種も、障がいのある人もない人も、自由にチャンスをあたえられ、存在を認められて生きていた」ということ。

その車椅子の彼の思いを受けとめて、作者は、障がいのある人たちに対するヘルプが、当たり前ではない日本の社会を変えていかなければならないと訴えています。

【創作童話部門】

審査委員　尾崎　美紀

《審査総評》

今年の応募作は、一般の部15作品、児童生徒の部６作品でした。児童文学は、あくまでも子どものための物語です。読み手の子どもに分かるということが、まず第一の条件です。

しかしながら、書き手が大人の場合、どうしても大人の感覚で書いてしまいがちです。また、子ども像というのも時代で大きく変わってきます。思い込みや時代のずれがあると、どうしても作品が独りよがりになってしまいます。だれもがかつては子どもだったことを思いだして、子どもの視点に立つことが大事です。まずは子どもたちをよく観察すること、そこから子どもたちのメッセージが伝わってくるのではないかと思います。

〈最優秀賞〉

作品名「真実」　　阿部　智美

幼い頃は大好きだった父親のことがだんだん嫌いになる。それは子供たちの成長の一つかもしれません。主人公は、ある日、約束の時間に遅れて泥だらけで帰宅した父親のことを許せないと思います。しかし、本当は人助けだったと知って、きちんと言葉にして伝えなければ、信頼も理解も得られないことを知ります。言葉というのは、お互いのコミュニケーションのためには欠かせないものです。時にはナイフのように人を傷つけることもありますが、思い切って言葉にしてみると、仲直りをするのは案外簡単かもしれません。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「ごめんがいっぱいと、大きなありがとうが一つ」　森園　順子

今も昔も、様々な家庭事情の子どもたちがいます。シングルマザーのお母さんを懸命に助けるまさこちゃんのことを、大人たちはあれこれ噂しますが、おばあちゃんはそんなことには耳を貸しません。いつもは毛嫌いしていたおばあちゃんを、主人公は反省と共に尊敬するようになります。人の価値が何で決まるのかを主人公は知ったと思います。真剣に生きているか、他人を思いやれるか、それを教えてくれたおばあちゃんは立派です。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「心の国のかけ橋」　鈴木　聖生

電車にはいろんな人たちが乗っています。疲れて眠っている人、人の迷惑を考えない人、スマホから目を離さない人、おしゃべりのうるさい人など、皆が自分の周りにガードを作って、他人のことには無関心です。作者はそれを『心の国』だと表現しています。その国から誰もがなかなか出ようとはしない。けれど、たった一言声をかけるだけで、国と国の扉はすんなりと開くことを知ります。見知らぬ者同士でも、実は心の国は繋がっていることをこの作品は教えてくれました。無関心は扉を錆びつかせ、心も錆びつかせます。

〈佳作〉

作品名「桜まつりに会いましょう」　大喜多　智子

病院の入院仲間のおじいちゃんとピアノ調律師の上原さんは、退院したらきっと桜まつりで再会することを約束します。病院での約束、それは命の約束です。おじいちゃんは退院したけれどやが

て再発し、上原さんも……中学生になったぼくは、上原さんに調律してもらえなかったピアノを前に、生きる意味を考えます。満開の桜の間を走り抜ける電車の中に、二人の幻を見ながら、きっと自分の夢を追いかけて行くでしょう。病院というところは、人生の縮図のような場所です。病気になって初めて、命の重さを知るのかも知れません。

作品名「しいの心の車いす」　岩本　珠寧

足の悪いしいちゃんのことを、こうちゃんはずっとそばにいて助けようと決心しています。けれど、小学校でクラスが離れ、車いすを押すのはヘルパーさんの役になってしまいます。友だちから「しいちゃんはかわいそうな子だから助けているのね」と言われて考えこみます。その答えを出してくれたのは、同じように車いすに乗っているおばあちゃんでした。車いすでテニスに励むおばあちゃんは、不便も多いけれどできることはたくさんある、と言いました。差別する人がいても、心の車いすになってくれる人がいれば大丈夫、とも。心の車いす、難しいけれどとてもいい響きですね。

作品名「友達」　藤本　忍

田舎の小さな小学校に転校してきた主人公は、教室を飛び出したりいたずらばかりするふうちゃんのことが理解できません。「ふうちゃんのやさしいところを見つけたら、きっと好きになれる」という友だちの言葉で、自分の心の狭さを知ります。足のけがで徒競走に出られない主人公を、ふうちゃんはゴールまで連れて行って一緒にゴールしたのです。だれもが心にやさしさを持っていますが、その表現方法は様々です。お互いを理解し合おうという気持ちが大事なのでしょう。

作品名「「少女」と「努力」」　田口　陵海

魅力のある友だちの真似をして、自分もそれに近づこうとしていた少女は、祖母に「人は全く同じ人はいない。それぞれが自分らしくあって初めて魅力的になれる」と言われ、真似することを止めてしまうのですが、少年には「前のような輝きがなくなった」と言われて混乱してしまいます。自分らしくあるためにはどうしたらいいのか。青春の大きな悩みを抱えて迷う主人公は、それでも一生懸命に前を向いて努力し続けます。欠点があるからこそ人は頑張れるのかもしれません。真似はやがて本物に変わっていきます。

作品名「ゴキブリ」　櫻井　香織

ウサギや猫などのかわいい動物を主人公にした童話はたくさんありますが、この作品はゴキブリという天下の憎まれ者を主人公として登場させました。そこがこの作品の面白さです。ゴキブリだって地球上の立派な生き物です。姿かたちだけで勝手に嫌われてはたまりません。少年とゴキブリの友情は、いじめや仲間外れの横行する今の社会に、大きな警告を発したと言えるかもしれません。がんばれ、ゴキブリ！と叫びたくなりました。

最優秀賞

《最優秀賞》

小説部門

うちの子に障害はない！

上松　敏治

改装された甲子園に、太陽が照りつけ、球児たちが汗を流す。サイレンが鳴り響いた。試合は中断され、大観衆のざわめきは一瞬にして青い空に吸い込まれ、多くの人が目を閉じる。

七十一年も前を思い出すのは困難で、戦争を知らない私には、今の生活がその上に成り立っていることを、忘れそうになるときすらある。ただ間違いなく戦争や戦後の暮らしは、今に繋（つな）がっている。その面影が現れたときに、私たちはいろいろなことを考え直さなければいけない。

「今日病院に行ったら、優登には障害があるって、はっきり言われたの」

息子が眠っているのを夫に確かめた後、八重子は病院で聞いてきたことを話しはじめた。

「優登はアスペルガー症候群なんだって」

理解できない行動の数々。私たち夫婦にとっては、医者が与えたひとつの通達は、絶望を与えるだけのものではなく、言い知れぬ安堵をも含んだ言葉だった。

私は次の日、用事があると伝え、仕事を残したまま会社を出た。何十年もの間勤めて、初めての体験だ。

人込みを避けるでもなく、センター街の大手書店に向かう。足早な大勢の人は、どこに向かっているのだろうか。本屋の中でもたくさんの人影が酸素を奪い合っている。この空間も、人々が目的地を探すのに大事な場所な

のかもしれない。
　広い店舗の、普段行くことのない奥の方にまで追いやられ、探していたジャンルを見つけた。福祉という棚と、教育という棚の狭間をつなぐように、アスペルガーという言葉を題名に冠した本が並ぶ。こんなにもたくさんあるのかというのが正直な感想だった。多くの人間にとって、行きつけの書店を持っていても、その中で動くスペースはほぼ固定されている。今日足を踏み入れたこの場所は、私にとって未知の領域。優登が運んできた新しい世界の扉が、目の前に並んでいる。
　数ある本の中から、選ぶとなく一冊目を手にしようとしたとき、すぐ後ろにいた若い夫婦の声が聞こえた。
「どれがいいんだ」
「そんなのわかんないわよ」
　男は帽子からはみ出た耳の上の短い毛を、何度も触りながら棚を見つめる。その風貌はすでに苦渋に満ちていた。
「とにかくヒロシは難しいのにしたら読まないんだから、簡単な読めるやつにしてよ」
「わかったよ。でも、どれがいいか、全然わかんねえんだよ。なあ、どれにする」
「私もわかんないわよ。この前急に、りょうが自閉症だって言われて、まだ動転してるんだから。とにかく協力してよね」
「わかってるよー。うるせぇなぁ」
　この夫婦にも何日か前、私達と同じ知らせが届いたのだろう。予想もしない方角から、突然舞い降りた衝撃を、しっかりと夫婦で受け止め、育むことができるのだろうか。
　私は、夫婦が置いていたベビーカーを気にしながら、静かに手を伸ばし、一冊の本を取ろうとした。すると今まで強い口調で夫に話しかけていた妻が、急いでベビーカーを自分の方に引き寄せると、「すいません」と優しい声で微笑んだ。同じ苦しみを抱える者同士という空気を、どこかに感じているのだろうか。こちらも恐縮し、小さく頭を下げた。若い夫

婦は議論を重ね、大きめのゴシック体で題字が書かれた一冊の本を手にして、この売り場を去った。

その後も、私は何冊かの本を順番に手に取り続けた。アスペルガー症候群、高機能自閉症、発達障害、並べられた本のタイトルを見ている限り、私にはその境界線は、全く見えてこなかった。結局何も手にせず本屋をあとにした。それでも、費やした時間にたいした後悔もなく、やけに納得しながら今歩いているのは、そのうち八重子が買った適当な本が家にあるはずだという、甘い考えが心のどこかにあったのだろう。

食卓に流れる慌ただしい音の中で、八重子は、夕食の後片づけを手際よくこなしながら躊躇(ためら)いがちに呟(つぶや)いた。

「あのね、病院まで行って、いろいろとはっきりしたから、お父さんとお母さんにも、優登のこと話に行くべきだと思っているの。実家の父と母にも言わなきゃいけないし」

意を決した言葉のあとに、少し間をおいて八重子は続けた。

「あなたのお父さんとお母さん、どう言うでしょうねぇ」

短い問いかけに、臆病さが顔を出している。

「大丈夫だよ。どうなることでもないし」

口にした直後、私はまた得意のいい加減さが混じった発言を、少し後悔した。

土曜日の夜、話があるから明日みんなでそっちに行くとお袋に電話した。日曜は薄い雲が、神戸の山と海を覆っていた。車で三〇分ほど離れた須磨の実家に着いたときは、二時前だった。この海はいつ見ても美しい。現在という時間に、古の雅が霞ながら重なり合っている。

お袋の顔がそわそわした感じなのは、車から降りるとすぐに解った。優登が、「こんにちは」と声をかけたあとに、八重子が優登を連れて、南側の和室にいる親父のもとへ挨拶

に行った。すると、まるで盗みでもするかのように、八重子の目を気にしながら、お袋は私に寄ってきた。
「あんた、八重子さんと別れる気かい。あんたにはもったいない人だと母さん思うよ。そりゃねぇ、結婚ってものは他人には言えないことがたくさんあるのは解ってる。母さんだって、父さんと何度か別れようと真剣に考えたよ。でもさぁ、いろいろ考えると、やっぱり別れなくて良かったと思ってるんだから」
　昨日の電話がこの悲劇を作り上げたのだろう。ほっておいたらいつまで喋るのか解らない。はじめは小さかった声の大きさも、段々いつもと変わらなくなってきた。
「違うよ、お袋。そんなんじゃない」
「じゃあ、あんたが浮気でもしたのか、謝りな。なんなら母さんもいっしょに謝ってあげるから」
　お袋は、これだけ見事にストーリーを紡ぎ出し、早口で喋り、自分の役どころまで決めてしまっていた。
「だからお袋、ちがうって。離婚の話じゃないよ」
「えっ、そうなんか。普段は仕事、仕事って、呼んでも来ないあんたが、『話がある』なんていうから、てっきり別れ話だとばっかり思っていたよ。なんだかねぇ」
　お袋は、一人で勘違いし、一人で騒いで、挙げ句の果てには、騙(だま)された悲劇のヒロインを、ため息混じりに演じ終えた。それからお袋は、何やらぶつぶつ言いながら台所に入っていき、ガラスのコップを用意し始めた。
　この家に来ても、優登の行動には決まりがある。まず庭の小さな池にいる金魚に、餌をやらなければいけない。親父もそのことはよく解っていて、古い棚の上にのせてある餌の入ったカンカンを優登に手渡し、いっしょに池のそばへ向かう。猫よけの網をゆっくりめくると、優登の顔を覚えているのかいないの

か、食事が始まる金魚たちが歓迎して水面に寄ってくる。優登はいつものように、小さな餌を一粒ずつ丁寧に取り、それぞれの金魚目がけて投げつける。この不思議なシェフを、金魚たちはどう思っているのだろうか。ここ数年見慣れた光景だ。このとき、何も言わずに優登のそばに立つ親父の目は優しい。私の昔の記憶には、あまり残っていない眼差しだと、いつも思う。

親父とお袋は、戦後田舎を出て、神戸という新しい土地で暮らし始めた。多くの家族がそうだったように、何もかもが順調だったわけではない。日々の生活を営むための仕事も大変なら、なまりの残る言葉に苦しみ、寝言で泣きながら悔しがっていた親父の日々を、母からこっそり聞いたことがある。

しかし、長男の私には、そんな姿は微塵も見せず、いつも厳しかった。口うるさくは言わなかったが、自分が出来なかった勉強を、やるからにはしっかりやれと言っていた。

それにひきかえ、四つ下の妹には甘く、結局それが災いしたのか、自分の人生を好きに生きている妹は、まだ結婚とはほど遠い世界で暮らしている。そんな親父にとって、優登はたった一人のかけがえのない可愛い孫なのだ。

「優登、おいで、麦茶入れたよ」

今度はゆったりとしたお袋の声が、庭に届いた。真っ直ぐに駆けつけた優登は、五本の指で羽交い締めにするようにグラスを持ち、

「ありがとうございます」

と言って、一気に飲み干した。年配の者にとって、礼儀正しさは何よりも慎ましく思える。

「本当に、この子はかしこい子だねぇ」

安堵と感心の混じったお袋の声が、ゆっくりと流れる時間を、さらに引き延ばしているようだった。

私と八重子は、昔ながらの南向きの縁側に腰を下ろした。お袋も優登にお代わりを入れ

ると、日の当たらない畳の上に静かに座り込んだ。庭から帰ってきた親父も、立ったまま麦茶を飲む優登を挟んで、私たちの反対側に腰を下ろす。それとほぼ同時に、二杯目の麦茶を勢いよく飲み干した優登は、さっきの池の少し西にある、ししおどしに向かって走っていった。優登は小さい頃から水遊びが好きだった。このししおどしも、優登が喜ぶからと、親父が最近作ったものだ。現に親父の期待した通り、優登は不思議なぐらい長い時間、このししおどしを真剣に見つめている。

優登が私達のそばを離れ、最初に話し出したのは、またお袋だった。

「お父さん、離婚の話じゃなかったみたい」

昨日からの妄想が一段落したお袋は、肩の力が抜けたようにそう言った。

「わしは始めから、そんなことは言っておらん」

親父は、いつにも増してぶっきらぼうに答えた。二人の会話を聞き、八重子は少し微笑んで、私の方を見た。

おそらく親父は親父で、昨日からいろいろと考えていたに違いない。もしかすると、息子夫婦の決心を翻意させ、大事な孫をそばにいさせ続けるための言葉も、それなりに用意していたかもしれない。見当がはずれホッとした気持ちと、取り越し苦労独特の損をしたような感情が、言葉に刺(とげ)を含ませたに違いなかった。

じめじめした空気の中に、海沿い特有の潮風が流れた。淡路島と本土を繋ぐ雄大な橋を見上げる。この場所で感じる風は、小さいときからいつも頭の中に心地よい空白を生むような、そんな清々しさを運んできてくれた。

だが、今日はいつまでもこうしてはいられない。八重子の方に一瞬目を遣ったあと、私が話し始めた。

「話って言うのは、優登のことなんだ」

「優登がどうかしたのかい」

お袋が間髪入れず合いの手を入れた。心配そうな声なのがはっきりとわかった。
「実は、優登には障害があるんだ。アスペルガー症候群っていうやつで、コミュニケーションとか、人づきあいとかに問題が出てくるらしい。想像力が育ちにくくて、トラブルになりやすかったりするんだ」
さっきまでと違い、お袋はすぐには何も言わなかった。黙ったまま、持っていた麦茶の入ったグラスをお盆の上に置き、困ったときによくする、左手であごの上の肉をつまむような仕草をしていた。
誰も喋らない静寂が苦しくて、八重子から受け売りの知識を繋いで、また言葉にした。
「今すぐどうってことはないんだけど、病気じゃないから、一生治ることはないって。まあ、そんな心配しなくてもいいから。結構歴史上で有名な人もアスペルガーだったりするらしいんだ。例えばアインシ」
私の話の途中に、急に親父は立ち上がり、私や八重子の方を見ることなく、何かをかみつぶすようなきつい表情をし、低い声で怒鳴った。
「誰が言ったんだ。優登は普通に話せるし歩ける、障害なんかあるはずがない」
思いのほか大きな声だったので、離れた場所にいる優登の方を確かめようとしたが、木の陰になり見えなかった。私は慌てて親父を落ち着かせようと、無意識に立ち上がり言葉を発した。
「だからな親父、優登の障害は、歩けないとかじゃなくて」
「もういい」
言葉を吐き捨て、結局こちらを一度も見ることなく、親父はその場を離れた。
立ちすくむ私の後ろで、八重子は下を向いたまま動かなかった。お袋はその場を取り繕う役をするべきだと思ったのだろうが、どうしようも出来ず、さっきより頻繁にあごの肉を掴む動作を繰り返していた。

潮風の届く庭の隅で、ししおどしを見続けたいという優登をなだめ、私たちは帰りの車に乗り込んだ。家までの三〇分間は、優登が対向車のプレートナンバーを根気よく読み上げる音以外、何も聞こえなかった。

マンションの前で、八重子と優登を先に車から降ろした。駐車場に車を止め、重い気持ちで玄関のドアを開けたときには、優登はもう最近お気に入りの、プラッチック製のブロックに熱中していた。このブロックは、ひとつのピースを違うピースと結合させる度に「カチッ」という音がする。乾いた音だが、決して不快な音ではない。優登が繰り出す、素早い手の動きから発せられるこの連続音が、我が家では好評だった。しかし、さすがに今日は虚しく響いている。

八重子はリビングのテーブルに浅く腰掛けていた。両肘をつき、左右の手を口の辺りで重ね、不規則にゆっくりとその手の上下を交互させていた。

「嫌な思いさせて、悪かったな」

帰りの道中、口にすることのできなかった言葉。心の中で何度も反芻した思いだから、いつもワンテンポ遅れる私の発言を、珍しく早めたのだろう。

「ううん。私こそ。何も言えなくてごめんなさい」

重ねた手がテーブルに着地した。

「お父さんには、きっと辛いでしょうね。優登のこと、本当に可愛がってくれてるし、たったひとりの孫ですものね」

「そうだなぁ」

「甘かったのかなぁ」

物憂げに囁いた八重子の声は、少し湿った声のようにも思えた。言葉に秘められた落胆と、やるせなさから生まれた微笑みが、アンバランスで悲しい。今日一日の出来事が、短い時間に、広く重く私の心に沈み始めた。甘く考えていたのは私の方だと、そう思わずに

はいられなかった。
　世の中や政治が、福祉という合い言葉をかかげ、どう騒ごうと《障害》という現実は、社会から肯定的に理解されているとは言いがたい。その言葉が与える不安は、多くの人の思考にはびこり、叶うものなら、生涯近づけることなく終わりたいと、多くの人が願っている。
　戦争が終わり、がむしゃらに進むしかなかった時代。ひたすら生きることに全力を傾ける。そうせざる得なかった時を通り抜けてきた人々には、なおさら障害は、目を背けたいものだった。
　同時に、他人事か、我が身に降りかかってくるかによって、こうも大きな違いをもたらす言葉も少ないのだろう。親父もきっと、私から《障害》という言葉を聞いた後は、どんな説明も耳に入らなかったに違いない。日曜日の午後には不似合いなほど、頭の回転が良く、ものごとの道理が、自分の中を行き来する。当たり前のことかもしれないが、父親を責める気持ちは、自分の中には全くなかった。
「また、機会を見て、おれから親父とお袋に話をするよ」
「ありがとう、お願いします。私の両親には近いうちに私から話をしておくから」
『一緒に行った方が良いなら行くけど』と言おうとして、気づいたら、言葉はすり替わっていた。
「ああ、頼むよ」
「うん」
　大事なことから、瞬間的に逃げる癖は、昔から変わっていない。

　お盆を過ぎたものの、まだ残暑が厳しい夜だった。食事の片づけをしながら、
「今日、お母さんから電話があったの」
　と八重子が話してくれた。私の目を見るでもなく、布巾をテーブルの上で動かしながら、ゆっくりと言った。

あの時以来、実家には帰っていない。こんなに長く帰らなかったのは、優登ができてからは初めてのことだ。
「そうか。なんて言ってた」
「優登が夏休みの間に、一度来ないかって」
平静を装う会話が、どことなくぎこちないことは、お互い充分にわかっていた。
「長いこと行ってないしな」
「うん。優登にとって、学校に行きだして、初めての夏休みだものね」
家族と実家との関係に、長い空白のときを生んだ核心の部分に触れることなく、二人の会話は進んだ。何気なく私の様子を探ろうとする八重子を、何気なく交わす素振りが上手く思いつかない。
「優登、今度の日曜日、おばあちゃんのところ行くか」
隣の部屋で、自分の時間を過ごしている優登に、私は不意に大きな声で話しかけた。
優登は、動かしていた手を止め、
「はい。おじいちゃんと、おばあちゃんと、金魚に会いに行きます」
と答え、また手を動かし始めた。即座の解答は、リビングにあった緊張感を含んだ八重子との会話に、ある一定の結論をもたらすものであり嬉しかった。
ただ、優登の中に、おじいちゃんおばあちゃんと、金魚の間に、明確な差があるのだろうかと、少し不安になりもした。

夏休み最後になる日曜日、交通量はそんなに多くはなかった。実家に着いたのは、予定通り二時過ぎ。縁側に日陰はなく、潮風が心地よいと言うには、まだ日が高すぎる。
車を止め、優登と八重子が玄関の方へ向かうと、お袋が出てきた。会えない時間が長かった分、優登を呼び止め、いろいろと質問した。皺の増えた顔に浮かび上がる表情は、まさにおばあちゃんの優しい顔だった。
おばあちゃんの質問に、優登はぶっきらぼ

うだが丁寧にひとつひとつ答えた。一通りの質問で、会えなかった時間が埋まると、お袋は一息吐き、優登は誰に促されるでもなく池に向かって走っていった。優登の小さな背中は、少し角張ったような動きをしながら目的地へ向かう。

お袋はその姿を見守りながら、ぽつりぽつりと私たちに話し始めた。

「まさる、あれからおじいちゃんもいろいろ考えてたみたいだよ。こんなこと言ったの解ったら怒られるから、じいちゃんには言わんといてほしいが、じいちゃん、そのアスペルガーとかいうやつの本も買って読んでたんよ。でも、私もそうだけど、障害とかようわからんし、ただ怖いだけなんよ。どうしてやったらいいのか解らんから、よけいに怖いんよ」

お袋の言葉は重かった。頭の中を一本の矢が駆け抜けると同時に、身体中に、等分に重力がかかるような深みを感じた。きっと八重子も同じだろう。

戦争時代を子どもで過ごし、戦後の騒乱を生き抜いてきた世代。私たちとはまた違う価値観を持つのは当然だ。《障害》という言葉が持つ意味も、重さも違う。

それに《子どもに障害がある》のと《孫に障害がある》のも、また違うだろう。行く末を長く見届けられないという不安がより増すのかもしれない。

「お母さん」

八重子は、それ以上言葉が出なかった。言葉に詰まったのか、それとも、彼女がよく口にする『ありがとう』という大切な言葉が、この場にふさわしいかどうか考えたのかもしれない。

「ところで優登は、何が普通の子と違うんだい」

お袋は、もの悲しげな表情で聞いてきた。

「細かく見ればいろいろちがう。でも、それが全部悪いことじゃないし、あいつがこれか

ら困らなければ、別にかまわないんだよ」
無責任な返事だ。自分でもそう思ったし、きっとお袋にもそう聞こえただろう。
「違うことが解らんから、不安なんよ」
今度のお袋の言葉は、明らかに語尾が霞んでいた。いつものように左手であごの上の肉をつまむような仕草をしながら、息子の回答への不満も、あまり強くは言えない何かを感じているのだろう。
私は私で、ちゃんと説明できない自分に歯痒さを感じると、不意に八重子のことが気になった。煮え切らない返答をする夫を、優登の父を、八重子はどう思っているのだろう。
私は大好きな場所に立ちながら、透き通る季節には似合わぬ溜め息を吐いた。目の前にある古より明媚な海は、穏やかなうねりを繰り返すだけで、晴れ渡る空と戦う気は全く感じられない。次のお袋の言葉が気になっていたとき、家の裏から玄関の方に親父が現れた。
「こんにちは。ご無沙汰してます」
八重子の挨拶は、高まった雰囲気の中で、ゆったりと響いた。
「やあ」
笑顔はなく、少し首を折るようにして親父は答えた。予想はできたが、たまらない沈黙が訪れる。大の大人が四人。狭い空間にお茶もなく佇(たゞ)みながら、何の会話もない。それぞれが、それぞれの方向を見ている。
自分しかない。諦めにも似た思いが、自らの中に沸き立つのを察した。この状況を打ち破るのは、いくら知識が貧しくても、気の利いた言葉が綴れないことを自覚していても、自分しかないと思った。知識の分量を根拠に八重子にこの役を回すのは、酷と言うよりも罪だと解っていた。
臆病者なりに腹を決めた。
聞こえない深呼吸を自分の中でして、息を吸い込み声にした。
「あのな親父、アスペルガーは」
あれだけ意気込んで決心したのに、その言

葉は数秒で打ち消された。
「もういい、わしはカタカナが苦手だ」
乾いた唇を一度噛みしめ、親父は続けた。
「ただ、優登は優登だ」
そばにいた三人の心に、はっきりと聞こえた。親父の言葉には、私の何倍もの決心と力強さがあった。少しだけ間をおいて、親父は続けた。
「何であろうと優登は優登だ。わしの孫だ。難しいことは解らんが、あいつはわしをじいちゃんと呼び、あいつのそばにいるとき感じるぬくもりが、今わしが生きている証であることは何も変わらん」
親父の告白が終わった。ぼんやりと開いた私の瞳は、親父の方をじっと見ていられなかった。目を逸らした先で、八重子がうつむきながら手を堅く握り、何かを我慢しているのが解って、余計に行き場を失った。
また沈黙が流れたが、前とは色が違った。海の色のように鮮やかではない。でも、多くの色が混ざり合いながら、清らかな色に近づこうとしているように私には思えた。
ことの次第を臆病に見守り、結末に胸をなでおろしたお袋が、一転して老練とした微笑みを浮かべ、おやつを告げる大きな声を優登に掛けた。見慣れたはずの海を背景に、優登が走り寄ってくる。我が子が主演し、生まれ育った須磨の夏空と海が脇を固める。できすぎた演出のワンシーンだった。
この日これ以上、家族ドラマに何の展開もなかった。ましてやその必要もなかった。ひとつの障害を機に生まれたわだかまりが消えた。いや、消えてはいないかもしれないが、大きな接点を見いだした。
帰りの車は、いつもと違って海沿いの道を通った。遠回りになるが、右手には、神戸を生きる人間の心に寄り添う海が見える。また秋が来る。背中の方から車に飛び込む夕陽のオレンジは、どんなに日射しの強い日でも、次の季節を想像させた。

私と八重子には、長い間重くのしかかっていた不安が薄れゆく安堵と、幾ばくかの疲労感が入り交じっていた。優登はいつもと同じだった。祖父母の家を出るとき、あらかじめ車のルートが違うことを説明し出発した。どの道を通っても、窓の外の景色より、対向車のプレートナンバーに関心を示している。これもこだわり。優登が見つけた、自分を落ち着かせる大切なスキルなのだ。

ハンドルを握りながら、親父のあの時の台詞が、前から考えていたものかどうかが頭をよぎった。でも時間が経つにつれ、もうそんなことはどうでもいい気がした。優登の周りに愛があることの実感が、ほかのたくさんのことを無意味にしたのかもしれない。去りゆこうとする夏の一日が終わった。

直前に訪れた感慨と、目の前に横たわる現実を重ねながら、八重子が呟いた。

「障害を受け入れるってどういうことなのかなぁ」

「難しい」

自分でも珍しいくらい、ためらわず本音が声になった気がした。

「ただ」

「ただ、なに」

静かな口調の中にも、興味が満ちた声で八重子が問い返した。

「一口に障害を受け入れるといっても、人によってそれぞれ大きな差がある。それだけはわかった気がする」

「そうね」

八重子がゆっくりと相槌を打った。

《最優秀賞》

随想部門

新たなる、この温もりの中で

塚口　佳子

〝メダカーノガッコウハーカワノーナカー〟

エレベーターを降り、三階のフロアに入ると、今朝もCDプレーヤーから童謡が流れている。広いリビングルームには、いつもの顔触れがそろっていて、その中に夫の姿がある。湯上がりのさっぱりした顔をして、夫は童謡に手拍子を打っている。とても楽しそうだ。

夫が若年性アルツハイマーと診断されてから、もう七年になる。若年性の場合、進行が速いというが、夫の症状はどんどん進んで、要介護5となった今では私を妻と認識できず、母を恋う幼子となって毎日を生きている。教師として定年まで勤めあげたかつての面影はなく、当時の記憶も彼のその心にはない。この介護付有料老人ホームに入所して四か月になるが、新しい環境にすぐに馴染んで、笑顔多くマイペースで過ごす日が続いている。穏やかな性格の彼は、介護スタッフからも施設の先輩入所者さんからもスムーズに受け入れられて、私を安堵させてくれたのである。

「間違いなく認知症です」と診断されたあの七年前の夏から始まった在宅介護の歳月。それは、看護師の資格を持つ私であっても、戸惑い、心揺れることの多い日々であった。養護教諭として三十九年、児童たちから「保健の先生」と呼ばれたあの活気ある日々を思えば、あまりにも違う毎日だったからである。

夫の症状は日に日に進行していった。私は定年後、看護師として老人介護施設に勤めていた。だが、夫を訪問ヘルパーに任せることが困難になり、私は八年間の看護師生活にピ

リオドを打った。第二の天職とさえ思えた仕事との別れは辛かったが、いざ夫と向き合う身となった時、施設での経験がどんなに私の力となってくれたことだろう。

その施設には、数多くの認知症の入所者さんがいた。当時、六十三歳という高齢看護師だった私だが、そのおかげで介護を必要とする人々の身近な存在として寄り添うことができたと思っている。「あんたは私の亡くなった家内と同じぐらいの年齢かな」「お部屋の仏壇のお花の水、替えてね」「背中の湿布、貼ってくれる?」お年寄りたちは、いつも私を頼ってくださったが、思いを表現できない認知症の方々への目配り、心配りも決しておろそかにせず私なりに努力した日々であった。ベテラン看護師に比べれば、点滴注射や採血などの技は劣っていたが、「気にせんでもいいよ。あんたの看護には心があるからね」とのあるお年寄りの言葉が大きな支えとなった。縁あってその施設の住人となられた方々の余生に、安らぎと温もりを与えたいと、手を握り、声をかけていたあの頃、私はまだ、自分や夫を待つきびしい運命を知らずにいた。

当時、夫はデイサービスセンターに通っていた。気分の波はあるものの、このままの毎日が続くものと楽観的に考えていたのである。しかしながら、センターに通所すること四年、夫の病は進み続けた。主治医からは、「二歳児か三歳児のつもりで接してあげてください」と言われるまでになり、デイサービスの現場でも他の利用者さんたちから孤立しがちとなり、笑顔なく無表情な状態が増えていった。変わりゆく夫の姿に、私の思いは乱れた。

〝できるだけ長く、できればずっとこのまま、在宅で夫と暮らしたい〟夫の発症以来、私はその願いを抱いていたが、夫の変化をみつめる中、〝それでいいのか〟と自問することが増えたのである。〝もしかしたら私の対応は、夫のためになっていないのではないか、

デイサービスに甘えて夫を送り出すことは、結局は私自身を楽にするためだったのではないのか〟とさえ思うようになり心は揺れた。

毎朝の夫との散歩中、近所の方々からは、いつも好意的な言葉をかけていただいていた。「奥さん、ご主人のために本当によくなさっていますね。ご主人、お幸せね」「奥さんがナースさんだから、ご主人、恵まれておられますねえ」そんな声かけによろこびを感じて、笑顔を見せていた私を、傍らの夫はどんな思いで見ていたのだろうか。もう、ほとんど言葉を持たない夫の心の声に気づかなかった私。延長利用の夜、デイサービスセンターへ迎えに行った時のことだ。ぬいぐるみ人形を抱えて、ひとりポツンと座っている夫を目にしたあの夜の、鋭い胸の痛みを私は忘れない。

迷いは日々大きくなっていったが、それでも次のステップへのためらいがあって、施設への入所に悩んでいた私。その背を押してくれたのが、九州に住む私たちの息子であった。久しぶりに会ったその日、夫は、見知らぬ人を前にして緊張し、表情硬く、食事もせず、息子の呼びかけにも反応しないままであった。

「お母さん、在宅はもう無理じゃない？デイサービスに行っても、お父さん、もう楽しくないと思うよ。かわいそうだよ。穏やかに楽しく過ごせる場所を考えてあげようよ」

あの雨の日、私の迷いを断ち切ってくれた息子のやさしいその声は、今も私の胸にある。

春の終わり、夫は施設に入所した。結婚して四十五年、私たち夫婦にとって初めての別居生活が始まったのである。幸いにも夫は、かつて私が看護師として働いた介護付有料老人ホームに入ることができた。開設されて十年、地域でも評判のいいこの施設の、ほとんどの介護スタッフや看護師は、以前の私の仕事仲間だ。勤めていた頃、〝いつか私や夫も、ここでお世話になりたい〟と思えるほどに家

族の温もりを感じる施設であったから、願いが叶ったよろこびは大きい。

入所して四か月、自宅から徒歩三分の夫の新しい住まいへ、私は毎日面会に行く。手をつなぎフロアを散歩し、CDを聴き、絵本を開き、人形遊びをする。笑顔いっぱいの夫に会えるよろこびがある。私の幸せな時間だ。

お花見、茶話会、七夕まつり、そうめん流しなどのイベントも多く、それらの記念写真には、みんなと並んだ夫の明るい笑顔がある。月二回の音楽療法の日、夫は音楽に感動して涙を流し、そして最高の笑顔を見せるそうだ。あんなに偏食だったのに、みんなでテーブルを囲んで摂る食事の時間、夫は一汁三菜の料理をきれいに食べ、お皿まで舐めるという。高齢や認知症などのハンデイを抱えながら、それぞれの余生を精一杯に生きている夫たちとともに、私も余生をしっかり歩んでいこう。

この七月、神奈川県の障害者施設で、惨い殺傷事件が起きた。入所者の十九人が犠牲になり、二十七人が負傷したという信じがたいほどの大事件であったが、「障害者はいらない」と言うその犯人には、〝全ての命は存在するだけで価値がある〟という重い言葉は通じないのであろうか。犠牲者の名前は、この国に根強くある障害者への差別意識が壁になって公表されなかったのではないだろうか。性別と年齢のみが報道され、障害を持ちながらも懸命に生きてきたのに、理不尽な死を迎えた人たちの名は伏せられた。優生保護法が母体保護法に改正され、障害者の差別につながる項目が削除されてから二十年となった今も残る偏見、相模原事件が投げかけるものの重さを私は思う。〝障害者は不幸で価値が低い〟とする世間の視線を、かつて私も夫の傍らで実感したことが何度かあった。赤信号でも識別できず、車道に飛び出そうとする夫、買い物に行った時、見知らぬ人に近寄って握手しようとする夫、病院の待合室で順番を待てず動きまわる夫、それは明らかに普通ではな

かったが、それでも私は、夫と私を奇異の目で見る人たちの視線に傷ついたことがある。夫の手を握り耐えた遠い日を思う。このたびの事件で、遺族の方々のなかには被害者の名前公表を望まなかった方もいるのではないか。それは夫の友人たちに、認知症のことを伏せたかった頃の私自身の姿でもある。障害者を弱者と見る風潮が残る中、高齢者や認知症者は増え続けている。

「塚口さんも、いつかこの施設に入ってね」と、若いスタッフは笑顔で言う。「なんだったら明日からでもいいのよ。ご主人、きっとよろこぶでしょうね」

こんな会話が冗談ではなくなる日が、案外近いかもしれないと、七十五歳の私は思う。

遺言信託や成年後見人の案内を受けることが、このところ次々に増えてきている。まだまだ先のことと言えない年齢になり、なさねばならぬ課題は多い。だが、しばらくは夫を訪ねる日課を大切にしたい。新たなつながりの中で見せる夫の満面の笑みに励まされて。

今朝、面会に行った時のことだ。エレベーターホールで「塚口さん、お久しぶりです」と呼びかけてきた人がいた。四年前、私がこの施設を辞める少し前に、介護スタッフとして入ってきたYさんだった。五十代の彼女は、初めての介護職に戸惑い、先輩スタッフからのきびしい助言や指導に悩み、時には涙を流して暗い顔をして働いていた。同じフロアで働きながら私はそんな彼女を励まし、慰めた。

「私もね、不慣れな看護師で大変だったのよ」と声をかけ、ともに頑張ったものであった。

「あの時お会いしなかったら、あの励ましがなかったら、今、私はここにいません。おかげさまでもう五年目に入りました」

彼女の明るいその表情は、自信に満ちている。

「よかったわね。うれしいわ。よろしくね」

あの頃、笑顔を忘れていたYさんにとって、

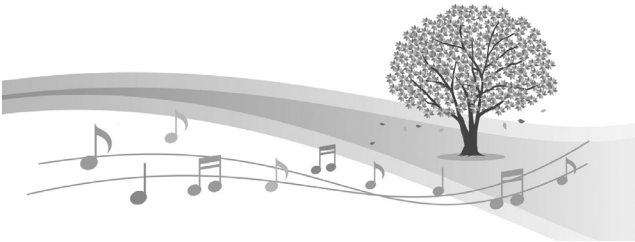
私の励ましは辛い道を照らす小さな光になったのかと、私はその肩にそっと手を触れた。

これまでもそうであったように、これからも私や夫は、多くの人たちと触れ合い、支えられて、余生の道を一歩一歩歩き続けて行く。

三階フロアのリビングルームと個室が、おそらく夫の終の住処となるだろう。ＣＤプレーヤーから流れてくる童謡を聴く時、小学校教師として過ごした日々の思い出が、ひとかけらでも甦ってほしい。ドングリコロコロの歌に手拍子を打つ夫に、木の実降る山里の、合掌造りの生家での日々の記憶が、おぼろげにでも戻ってくれたらどんなにいいだろう。

フロアの壁の鏡を見て、夫は「おーい」と鏡の中の自分に呼びかける。幼子に戻った彼のその傍らに、今日も明日も私の姿がある。

（平成二十八年九月）



《最優秀賞》

詩部門

輝け

内藤　廉哉

目覚まし時計が鳴った
目を開けると見慣れた景色がいつもと違って
見えた
薄い霧がかかっているようだ
体が重い
食欲がない
無理に口に押し込んでみたら
なぜか何の味もしなかった
その日から勉強も部活もやる気が出ない
大好きな読書もどこを読んでいるかわからな
くなる

ぼくはどうしてしまったんだろう
いつもの自分ではない
笑うことができない
いつも楽しいと思っていたことが全く楽しく
ない

ふとほたるを見たくなった
家の近くの川沿いを歩いた
暗闇の中に小さな光が一つ二つ
いつのまにか小さな光に囲まれてたたずんで
いた
光は輝いている
命の輝きだ
ほたるの小さな命の輝きとともに
ぼくの命も輝きだした
無性に走りたくなった
川沿いを走るぼくの額に汗がにじむ

目覚まし時計が鳴った
目を開けると見慣れた景色がいつもより輝い

て見える
体が軽い
朝食を勢いよく口に放り込み
「いってきます」
と大声をかけ学校へ走っていった

《最優秀賞》

創作童話部門

真実

阿部　智美

「まあ、パパっ！　その格好はどうしたの？」

お母さんの悲鳴に近い叫び声が、玄関のほうから聞こえてきた。

リビングのソファーでテレビを見ていたわたしは、慌てて立ちあがり、リビングの扉を開けて玄関に目をやった。お父さんの姿にギョッとした。全身、泥だらけだったからだ。肩から上は、かろうじて泥はねくらいだけど、服の色が何色だったのかよくわからない状態だ。時間がかなり経ったようで、服はほとんど乾いている。

「よそ見してたら、田んぼに落っこちたよ。まいった、まいった」

お父さんはのんきな口調で答えた。そんなお父さんの態度に怒ったのか、お母さんはいつもより高い声でいきおいよく、

「庭から呼んでくだされば良かったんですよ。家に入らないでください」

と言って、サンダルをつっかけ、お父さんの手をひっぱり、外へでていった。

今日は家族三人で、買い物に行く予定だったのだ。約束の時間をとっくに過ぎている。買い物に行く気分じゃなくなった。お父さんの顔なんか見たくないと思った。

気がつくと、わたしは家をとびだして、あてもなく歩いていた。

小さい時は大好きだったお父さん。でも、最近のお父さんは嫌いだ。時間を守らないし、ヘマばっかりしている。この前も額をケガして、なん針も縫って帰ってきた。理由を聞いたら、「滑って転んだ」と言っていた。

「麻衣、麻衣。どこに行くんだよ」
わたしに声をかけたのは、クラスメートで幼なじみの杉本隼人だった。今、一番会いたくなかった人物かもしれない。
わたしは歩みを止めて、つっけんどんに言った。
「わたし、急いでいるから。またね」
「麻衣のお父さん大丈夫だったか？　やっぱ、普通の人と違うよなあ」
こいつに見られたんだ。おしゃべりな隼人。もう終わりだ。
わたしは下を向き、小走りに進んだ。
「なあ、仕事の発表のことだけど。麻衣のお父さん刑事だろ。麻衣んちに班のみんなで行って、話を聞いてもいいか？」
隼人の言葉を無視して、わたしはどんどん先を急いだ。
お父さんの仕事も嫌いだ。できれば、みんなに知られたくないと思っている。
わたしは背が高くて声も大きいし、喧嘩も強い。だから、お父さんが警察官だと知ると、決まって、「やっぱり」とか、「こわ～」とか言われるからだ。とくに隼人が口うるさく言っていたのだった。
泥が服についた人とすれ違った。わたしは気になり、立ち止まって周りを見た。あっちにもこっちにも、泥だらけの人がいる。
友達のお父さんがいた。やっぱり泥だらけだ。にっこりと笑って会釈してきたので、わたしは戸惑いながらも挨拶をした。
「麻衣ちゃーん」
近所の駄菓子屋のおばさんが、手を振りながら歩いてきた。
わたしはおばさんを見て、ギョッとした。
「こんにちは、おばさん。その格好はどうしたんですか？」
おばさんも、お父さんに負けてないくらい泥だらけだった。
「どうしたもこうしたも、麻衣ちゃんのお父さんのほうがすごかったでしょうに」

「いったい、なにがあったんですか？」
「お父さんに聞いてないの？」
「はい」
「大変だったのよ。自転車ごとママと坊やが田んぼに落ちて。みんなで引き上げたの」
わたしは全身に電気が走った。すぐに平静をよそおうと、言葉を探した。
「ママと坊やは無事だったんですか？」
「かすり傷くらいですんだわ」
おばさんはそう言って、高らかに笑った。
「あっ、おばさん。風邪でもひいたら大変。早く、着替えて」
「そうね。じゃあ、お父さんによろしく」
おばさんと別れてすぐに、わたしは声をかけられた。お巡りさんだった。
「麻衣ちゃん、久しぶり。啓介は家まで、無事にたどりついたか？」
「うん。泥んこまみれだったけど」
大西のおじさんだ。「啓介」というのは、わたしのお父さんの名前。おじさんは、昔からお父さんと仲のいい友達だ。
「啓介のやつ、おれの顔を見るなりサッサと帰りやがって。ほんと冷たいやつだ」
「お父さん、『よそ見してたら、田んぼに落ちた』って。理由を言えばいいのに」
「はあ？　あいつらしいな。よけいなことは言わないよ。啓介は……」
一瞬、おじさんの顔がくもったのを、わたしは見逃さなかった。でも、すぐに笑顔になって、
「圭介に人命救助、ご苦労さんって伝えてくれ」
と言って、敬礼をした。忙しいのだろう。あわただしく自転車を走らせた。
わたしは、家に帰ることにした。歩きながら、いろいろなことを考えた。
お父さんがサッサと家に帰ったのは、おじさんの顔を見て、安心したのと、一生懸命な姿を見られたくなかったからだ。照れやさんで、褒められるのが嫌い。わたしはお父さん

と似ている。
わたしは胸がキュッとしめつけられた。
この間、置き傘を下級生の子に貸してあげた。その子は次の日、先生に傘を返してほしいと頼んだのだ。先生は名前が書いてあったいっちゃんをみんなの前でほめた。わたしは、いっちゃんの傘を間違えて貸してしまったことに気がついた。なんと同じ傘だったのだ。いっちゃんも最初は戸惑っていた様子だったけれど、気がついたのだろう。おどろいた顔でわたしを見た。でも、わたしは知らん顔をしてしまった。
わたしは、手柄を友達のいっちゃんに譲ったかたちになった。
それから、いっちゃんとは口を聞いていない。いっちゃんは、わたしを避けている気がする。
わたしは譲ったほうだから、気にならないのかもしれない。でも、いっちゃんはどうだろう。わたしに後ろめたいのではないだろうか？　人の手柄を横取りして、喜ぶいっちゃんではない。それに、いっちゃんは、思ったことをはっきり言うのが苦手だ。
良いことも悪いことも一緒なんだ。本当のことを言わなければいけない。後でキズつく人がいるかもしれないから。今度、いっちゃんにちゃんと話そう。気持ちを伝えよう。それにまだ、傘を間違えて貸してしまったことを謝っていないのだ。
「おい、こら。なんでいなくなるんだよ。人が頼んでいるのに」
隼人だ。しつこいやつだ。
「いいよ。家にきても」
「へっ、いいのか」
隼人は、わたしの返事が予想外だったのか、拍子ぬけした返事をした。
「うん。お父さんの都合、聞いとく」
「まじ、サンキュウ。おれ、将来の夢は刑事なんだぜ。お前のお父さん、さっき、かっこよかったぞ」

お父さんのそんな姿、ぜんぜん想像つかないけど……。
「じゃあ、また連絡するね」
「おう」
隼人は、嬉しそうな顔でそう言って、片手をあげ、走り去っていった。
隼人がわたしにつきまとっていたのは、刑事に興味があっただけなのかもしれない。
玄関先にお父さんが立っていた。
「ただいま、なにしてるの？」
「散歩だ」
ウソ。わたしを心配して待っていたくせに。
今ならわかる。わたしをこの場所で、いつも待っていたお父さんの姿を思いだしたから。
「大西のおじさんが、人命救助ご苦労様だってさ。本当のことを話してくれてたら、お母さんの怒鳴り声、聞かずにすんだのに」
「ああ。すまん、すまん」
お父さんは照れくさそうに頭をかいた。
お父さんは、この先も自分からは何も話さないだろう。でも、少しずつ、思いを伝えていけば変わるかもしれない。
わたしは手のひらをギュッと握りしめた。
「クラスで同じ班のみんながね。お父さんに仕事の話を聞きたいんだって。授業で『仕事について』の発表があるの。いい？」
「べつにいいけど、麻衣はお父さんの仕事が嫌いだろ。みんなにバレてもいいのか？」
「だって事実だもん。しょうがない」
「へえー、こいつはおどろいた」
お父さんは不思議そうな顔をしている。
「ねえ、お父さんの額のキズ、マンガのヒーローみたいだよ。どうしてできたの？」
「これか？　か弱そうな少年が強そうなお兄さんたちに囲まれててな……」
わたしはお父さんの話をさえぎって言った。
「ヒーロー気取りで助けに入ったのね。も

う、お父さんは若くないんだから、無理しないで。そうだ、お父さん。遅刻したバツに、わたしの好きなもの買ってよね」
「お父さんの小遣い、少ないんだぞぉ」
わたしは笑いながら、玄関の扉を開けた。
「お母さん、早く買い物に行こう。お父さんと玄関で待ってるからね」
「麻衣！　どこへ行ってたのよ」
　わたしは急いで玄関扉を閉めて、お父さんのほうへ振り向いた。

優秀賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

河上直子、二十二歳、新任

阿部　忠彦

直子には毎日が戦争だった。

何事もなく定時で学校を出た日など、四月から一日だってなかった。

祖母を加古川に残して始めた、念願の神戸での独り暮らしだったが、ワンルームマンションは寝るためだけの部屋になっていた。

五月の連休だって、証券会社に就職した里奈と弥生からは、「グアムだよ。早くおいでよ」というメールとともに、水着姿の写真が届いたのに、自分は祖母の家で溜まったノートの点検や教材研究等をして過ぎてしまった。

おまけに連休最後の今日は、生活指導担当から電話があり、万引きをした沢田裕太を大型量販店まで迎えに行き、親に引き渡して加古川に帰ってきたら、もう暗くなってしまっていた。

「ありがとうくらい言うてもろても、罰は当たらへんよね。お父さんお母さん」

直子は祖母の家の仏壇に祀られた父母の位はいに話しかけた。

「よく家で指導してくださいって、母親に言うたんよ。そしたら『ああ、どうも』言うて、子どもの頭をぼっこんって殴って終わりやもん。そんなんで、子どもが良くなるわけないやん。先生の指導にも限界がある。だから、保護者にはもっと諭すような指導をしてほしいんよ。子どもがかわいそうやわ。自分もそんな風に育ったんかなあ。裕太君の親も…」

「ちょっと、いつまでぶつぶつ言うてんの。ご飯が冷めてしまうで」

祖母の声を合図に直子は立ち上がった。テーブルにつくと、いつもながらの祖母の手料理が並んでいた。

直子は、休みの日は加古川で過ごすことにしている。五年前に祖父を亡くして独り暮らしになってしまった祖母が心配だからだ。

「だったら、加古川から通いなさい」

と、神戸市の学校に採用が決まったとき祖母は言ったが、直子は父母が暮らした神戸での独り暮らしにこだわった。

「お父さんとお母さんと三人で暮らした神戸の町に住みたいねん。神戸で独りで住んで、お父さんやお母さんと同じように先生することに意味があるねん」

祖母を説得するのに使った切り札だった。

直子が一歳になってすぐ、父母は阪神淡路大震災で同時に亡くなった。だから直子には父母の思い出が何もない。直子が生まれてから一年の間に撮り貯めたであろう写真も残っていない。がれきの下に埋もれたままになってしまったのだろう。

大学進学時に、直子は迷わず教育学部を選んだ。神戸で教員をしていた父母と同じ職業を経験し、自分の生き方を重ねることで、何も残さなかった父母と少しでも繋がっていたいと思ったからだ。

連休明けの週、木曜日の夜。職員室で仕事をしていると電話が鳴った。職員室には直子しか残っていなかった。

「はい、花の木台小学校でございます」

「三年生の沢田裕太の母です。河上先生？」

「ああ、はいはい。裕太君のお母さん。どうされましたか」

また、何かやったのだろうか。直子の胸を不安がよぎった。

「ちょうど良かった。先生が出てくれて。裕太が帰ってきてないのよ。八時前にパートから帰ってきたんやけど、ランドセルもないの。心当たりを探したんやけど居(お)らへんのよ」

母親の声が震えていた。
「旦那とも心当たりを探したんだけど、見つからへんねん。仲良しのお友達とか知らんかなあ」
よく遊んでいる子は何人かいるが、特に仲の良い子には心当たりがない。事件にでも巻き込まれたのだろうか。
「警察へは届けられましたか」
直子は焦ってきた。
「まだよ。先生に相談してからって思って」
母親の声も上ずってきた。
「前にもこんなことがありましたか」
「うん。それで、警察に連絡するかどうか迷ってるのよ。どうしたらいいと思う」
「分かりました。私も心当たりを探してみます。一時間後にお宅に伺います。でも、万が一事件や事故に巻き込まれていたら大変ですから、すぐに警察に連絡してください」
直子は電話を切ってから、職員室備え付けの大型懐中電灯を取りに走った。

だが、違う。もっと先にやるべきことがあったはずだと思い直した。深呼吸をした。そうだ連絡だった。管理職に電話。校長の携帯の番号を探していると、何かに思い当たった。どこかで読んだような気がする。作文。直子はついさっきまで点検していた作文ノートをひっくり返した。裕太といつも遊んでいる伊藤真二の作文。
「あった。これだ」
直子は思わず叫んだ。
「公園の木のうしろ、となりの家のブロックべいとの間に、ゆうたくんと二人でひみつき地を作りました。なかなか見つけられません」
直子はノートを放り出して職員室を飛び出した。懐中電灯を自転車の前かごに放り込むと花の木台団地横の公園に急いだ。途中で職員室の施錠と校長への連絡を忘れたことに気づいたが、それは後回しにすることにした。裕太を発見するのが最優先だ。

五分で公園に着いた。自転車を止めて、もう一度深呼吸をした。驚かさないように足音を忍ばせて近づいた。ブロック塀と木の間。懐中電灯を一点に絞って照らしてみた。木の枝を透かして段ボール箱が見えた。なるほどうまく作ったものだ。ざっと見ただけでは、見落としてしまう。直子は近づこうとしてためらった。間違いなく裕太なのか、野犬だったら、変な男だったら……。

「河上先生？」

「ヒエー」

直子は声を上げて振り返った。そこには裕太の母親が立っていた。

「びっくりした。お母さん。脅かさんといてくださいよ」

直子は胸をなで下ろした。

「やっぱりこの公園かな？」

「きっとあの中だと思いますよ」

直子は懐中電灯で木の枝の向こうにある段ボールを照らし出した。

「ええ。あんなんがあったなんて、さっきは気づかんかったわ」

母親は早速近づこうとした。直子は手をつかんで止めた。

「お母さん、裕太君があの中にいても、前みたいにいきなり叩くのはだめですよ」

「何で。私や旦那がどれだけ心配したか。それに先生だってこんな遅くにきてくれてるのに。謝らせな。うち我慢でけへん」

母親はそう言うと、なおも段ボールに近づこうとした。

「だめですって。今日帰ってこなかったのには理由があるはずです。万引きのときもお母さんは理由も聞かずに叩いて注意しただけでしょう。それで、きっとまた、こんなことやってるんですよ。理由を聞いて、ちゃんと裕太君が納得できるようにしてやらないと、何度も繰り返しますから。ね」

母親は返事をせず、直子の手を振り払うとさっと近づき、跪（ひざまず）いて一気に段ボールを剥が

した。取り払われた段ボールが直子の足下に飛んできた。

見えた。裕太は丸くなって寝ていた。母親はにじり寄ると、覆い被さるように裕太に抱きついた。肩や背中が震えだした。長いことそのままの姿勢でいた。

直子は自分の頭を叩いた。直子の心配など杞憂に過ぎなかった。親子なのだ。前のことも頭を叩くだけで、案外母親の気持ちは裕太に通じていたのかもしれないし、今回だって母親の涙だけで通じるのかもしれないのだ。言葉で諭すことにどれだけの効果があるのか分からなくなってきた。母親に生意気なことを言ってしまったと後悔した。

「先生、ちょっと手伝ってもらえませんか」

寝ている裕太は、母親一人で抱きかかえて引っ張り出すには重いようだった。直子は母親に手を添えた。一瞬、自分もこんなふうに助け出されたのだろうかと思った。

あの震災の朝、生きていることを必死で訴えるかのように泣き叫んでいた直子を、近所の人たちは手を伸ばし手を伸ばし助け出してくれたのだ。

直子は温かく重い裕太を抱いて、改めて思った。この重さは命の重さなのだと。自分は子どもの命を守る仕事をしている。自分のこの手は、あのとき助け出してくれた多くの人と同じ、命を守る手なのだと。その中のひとつの手でも、迷ったり泥が付いていたりしたら、純真な子どもの命は危ういのだ。

母親は裕太を背負って、団地までの道を歩いた。直子はランドセルを肩に背負い、裕太がずり落ちないように背中に手を添えた。

「先生、ごめんね。万引きのときも今日も。私、昔っから先生っていうと叱られてばっかりやったから苦手やねん。だからつっけんどんになってしまうの。本当はもっと話を聞いて、裕太のことも何とかせなあかん思うてんねんけど、手が回らなくて」

「ええ。良いんですよ。ゆっくりで」

団地の部屋に着くと、男性が出てきた。
「うちの旦那です」
紹介された男性はぺこっと頭を下げた。
「見つかって良かったな。ほな仕事に出かけるから。後はまた帰ってきてからな」
男性はそう言うとそそくさと出て行った。
「先生上がって。ゆっくり話しとうなったわ」
直子は台所とリビングがいっしょになった部屋に通された。子どもがいる割には良く片付けられている。きちんとした性格なのだろう。
「何でも買うてやってんのに、何で万引きしたり家出したりすんねんやろねえ。何が不満なんか」
母親は、横で寝ている裕太の頭を撫でながら言った。直子はうなずきながら聞いていたが、電話を受けたときから心にひっかかっていた疑問を口にした。
「お母さん。さっきの男性は……」
直子が最後まで言う前に、母親は答えた。
「ああ、旦那。内縁。若いやろ。五つ違い。裕太が懐かんかったら困るから、徐々に慣らして結婚しよう思うて。泊まれる日は、ここに泊まって、仕事に行ってもらってるの。この子は懐いてんのやら懐いてないのやら、分からへん。表情の乏しい子やから」
「何曜日に泊まられるんですか」
「決まってないけど、大体日曜日と水曜日。今日は夜からの仕事なの。昨日の夜から今までここに居て、さっき仕事に出ていったっていう訳なの」
前の万引きも水曜日だった。直子には万引きや家出の原因の見当がついてきたが、どう切り出すか迷った。ストレートに言えば、母親は反発するかもしれないし、遠回しに言えば伝わらない恐れがある。直子は考えこんでしまった。
「どう思う。何でも言うて。こんな遅くにここまで来てもろうたんやから。なあ、何でも

言うて」
「じゃあ」と、直子が身体を乗り出すと、横に寝ていた裕太が目を覚ましてむっくりと起き上がった。
「お母さん」
裕太は目をこすりながら母親の膝の上に乗ってきた。
「先生、こうや。もう三年生にもなってんのに、こないしてくっついてくるんや。うっとうしいてかなわんわ」
裕太は、直子に話をするきっかけを作ってくれた。
「お母さん。それや思いますよ。原因」
母親は怪訝な顔をした。
「思い出してください。前に家出したときも万引きしたときも、彼が家に来ていたときじゃなかったですか」
母親は振り返ってカレンダーを見た。
「そう言えば、そうやわ」
「まだまだ、甘えたいんですよ。でも、彼が来ていたら甘えられない。お母さんに、もっと自分の方を向いてもらいたい。だから、そんなことをやっているんだと思いますよ」
「そうなんか、裕太」
母親が抱いている裕太の顔を覗き込むと、裕太はこっくりとうなずいた。
「私はちょうどこれくらいのとき、震災に遭うて避難所暮らしやったわ。その後も親が大変で、甘えるなんてことなかったから、気づかんかったんかなあ」
母親は裕太の頭を撫でながら言った。
「どれくらいやったんですか。避難所」
「今から考えたら、ほんの三ヶ月ほどの間やったんやけど、そのころはほんまにここを出ていけるようになるんやろかと思うくらい、長うに感じたわ。そのうち仮設に移って、市営住宅にも当たってしもうたけどな」
「そうですか。そんな状況じゃ、甘えるなんてことできませんでしたよね」
母親はため息をついた。

「周りの目ばっかり気になって、お父ちゃんもお母ちゃんも気いばっかり使うてなあ。今でも、たまに避難所や仮設での生活を思い出すと、寝られへんようになるんよ」
裕太は母親の膝枕で、また寝てしまった。
「旦那と話して、この子の気が済むようにしてやりますわ。ごめんな」
母親は、また裕太の頭を撫でた。
直子はちょっと気の利いたことを言おうと思ったが、さっきの母親の涙を見ているだけに何も言えなかった。
その日、直子がマンションに帰り着いたのは日付が変わってからだった。

「嘘やろ」
五月の最終月曜日。教室に入るなり直子は叫んでしまった。
クラス一の暴れん坊、正が左目の周りを真っ青に腫らしていたからだ。直子の頭は瞬く間にフル回転しだした。まだ、一日が始まったばかりだというのに。
「どうしたん。それ」
直子は正に駆け寄って跪き、抱きしめた。
「大丈夫、先生に任せなさい。何も怖くないから。先生は君の味方やから」
誰にやられたにしても、この子を守るのは私だ。許せない。やってやる。自分はこんなときのために教師になったのだ。力を発揮するのは今だ。子どもを悲しませるやつは許せない。直子は決意を固めた。そして、ひとつ息を吐いて心を落ち着かせてから聞いた。
「誰にやられたん。嫌やったら答えなくてもええのよ」
あんなに固い決意をして発した質問だったのに、直子は逃げ道を用意してしまった。正が誰にやられたかを言わなければ、対処のしようがない。ああ、この期に及んで自分のずるさに嫌気がさした。だが、子どもは正直なのだ。直子の思いとは裏腹に正はためらいもなく答えた。

「お父さん」
嗚呼、正の口からいちばん聞きたくなかった言葉。父親からの虐待。
「そう、そう。痛かったなあ。痛かったなあ」
他の言葉が思い浮かばず、直子は正の背中を撫で続けた。
正の父親とは面識がない。どんな父親か分からない。落ち着いて。思い出そう。正の家庭環境。四人家族。再婚。正は母親の子。妹は父親と母親の子。父は無職。母親は看護師。勤務は不規則。家庭訪問で母親がそう言っていた。なさぬ仲の子どもに夫が暴力を振るう。テレビや新聞でよく報道される話。子どもが亡くなることもある。こんな青あざになるくらい殴るなんて。当たり所が悪かったら失明していたかも知れない。絶対許さない。例え相手が父親でも。いや、父親だからこそ許せない。悲しむ子どもをなくすために、私は先生になったのだ。
抱きしめていた体をそうっと離すと、正はふさがった左目も必死に開いて言った。
「ぼくが、ちいちゃんのめんどうみてってお父さんに頼まれたのに、ゲームしてて、ほったらかしにしてて、ちいちゃんが机の上から落ちて、頭打って泣いた」
父親が殴った理由は分からなくもないが、いかなる理由があろうとも三年生の子どもに手をあげてはならない。ひとつ間違えば死に至る。いくら正に落ち度があったとしても殴るべきではない。
「だから僕が悪いねん」
正は直子に訴えた。目に涙をためながら。
「ううん。君は悪くないの。絶対殴ったらあかんねんから」
直子も正の目を見つめて言った。
「お父さん。今日も家に居るやんな。先生が話をしてあげるから安心しなさい」
「先生、ぼくのお父さんに何て言うの」
「決まってるやんか。正君を殴らないでくださいって言うんよ」

正は直子から目をそらせて床を見つめた。
「それなら言わんでもええわ。ぼくが、また殴られるかもしれへんし、先生だって殴られるかもしれへん」
「嘘。お父さんってそんなに怖いの」
直子は思わずそう叫びそうになったが、寸前で言葉を飲み込んだ。私は教師。冷静に。
「大丈夫、そうならないようにうまく言うから安心しなさい」
直子は左手で正の頭を撫でながら、右手で胸を叩いてみせた。おまけに笑顔も作って見せた。自分でも引きつっているだろうと思いながらも。
こんな日に限って時間が過ぎるのが早い。授業はあっという間に終わってしまった。
直子は自転車を押して、正に付き添って家へ行った。
「先生が来てるよ」
先に中に入った正が父親に声をかけた。
「何、目のことで担任の先生が来てるってか。やっぱり来たか。新任や言うてたなあ」
家の中の会話が丸聞こえだ。
「正君の目のことできました。お父さんにやられたというもんで」
直子はいきなり核心に触れた。自分でもけんか腰なのが分かった。玄関ドアの内側へ入った。入った拍子にドアが閉まってしまった。
「大きな声出すなや。狭い団地や。他のもんに聞かれたら、なり悪いやないかい。それぐらいの配慮もでけへんのか。先生やのに気い効かんやっちゃのう」
バリバリの関西弁。のっそり出てきた正の父親は大きかった。百八十センチはあるだろうか。ひげもじゃで、ランニングシャツからはみ出ている肩や腕には模様が……。直子は一歩下がったが、ドアに退路を阻(はば)まれた。
「なんど、文句、ありまんのんか」
正の父親は顔を斜めにして、一語一語区切り区切り聞いてきた。

「失礼な言い方になるかも知れませんが、お父さん。ちょっと間違ったら失明するところでしたよ。正君のやったことは悪いでしょうが、何も殴らなくてもいいと思います」
怯(ひる)むな。こういう男には最初が肝心だ。回りくどく言うよりも単刀直入の方が良い。
「躾(しつけ)や。わしの家での躾に、何で学校が口出しせなあかんのや」
「殴る躾はないと思います。躾けるんだったら優しく諭してやらないと効き目がありません。殴ったら、正君の心には殴られたという記憶しか残りません。何でやられたかなんて分かってないと思いますよ」
直子は声が上ずっているのを感じたが、考えてきたことを必死で伝えた。
「先生、独身か、子どもおらへんねやろ。子どもは丁寧に言うても分からん。叩かれて痛いから、今度からやったらあかんて分かるんや。そやないと次もやりよる」
「私が、例え若くても、独身でも、子どもがいなくても、叩くのは躾やないということぐらい分かります。お父さん。この子に優しい子に育ってほしいと思いませんか。優しく育てられた子にしか、他の子に優しく接しられません。四月から正君を見てきましたが、荒れていて他の子に暴力をふるったりしています。それは、家庭での愛情不足が原因としてあると思います。自分が家で優しくされていない反動だと思いますよ」
足は小刻みに震え続けていた。言い終わってから、直子は下半身にぐっと力を入れた。正論なのだが、自分でも言い過ぎたかなと思った。正の父親が直子の方に一歩足を踏み出して、顔を近づけてきた。
「何やと、言いたいこと言いやがって…」
直子は目をつぶりたいと思ったが、しっかり見開き、瞬(まばた)きもこらえて見返した。
「ななな、何ですか」
「俺はなあ、大震災で一人生き残ってしもたんや。高校一年やった。周りみんな死んでし

もた。結局、おじさんに育てられることになった。先生分かるか。一晩で何もかも変わってしまうんや。一生懸命努力したこともなにも、全部なくなってしまうねん。そないなったら、もう何してええか分からへん。バイク乗り回しても夜中まで遊んでも、理由もなくけんかしても、何にも答え出えへん。だれも教えてくれへん。これからどうしたらええんか。俺らの周り、そんな子らばっかりやった」

父親の声が湿り気を帯びてきた。

「それでも、どうにか高校卒業して就職して、神戸の町離れんと頑張ってきたんや。それで結婚して子どもができた。だから、いっぱい教えたいんや。俺らがしてもらわれへんかったことを子どもにしてやりたいんや。でも分からへんねん。何をどう教えてええか分からへんねん。教えても全部壊れるかも知れへんっていう不安も未だにあるしな。だから、てっとり早くどついてしまうんや」

父親は、直子にすがるような口調になった。

「それでも俺が悪いちゅうんか」

直子は体を硬直させたまま答えた。

「お父さんのおっしゃっているのは、言い訳で詭弁です。同じ環境でも、手を出したり大声を出したりしない人はいっぱいいます。言い訳ばかりしてたら、子どもに責任の取れる親にはなれませんよ」

「何やと」

父親は拳を握った。直子は目をつぶった。

「やあ、びっくりしたよう。先生、根性あるなあ。言いにくいこともはっきり言うし。たいしたもんや。たいがいの先生は、俺の顔を見たら『気いつけてください』言うて帰ってしまうねんけどな」

父親の声が穏やかになった。直子はそっと目を開けた。

「あんたの負けや」

母親が妹を抱いて出てきた。

「先生、ごめんね。驚かして。この入れ墨は

書いてあるだけ。シールよ。この人痛いのん嫌やから本物はようせえへんの。このひげも付けてるのよ。なめられたらあかんて。あんた、素顔みせてあげなさい」

父親はばつが悪そうに付けひげをとって眼鏡をかけた。直子は思わず吹き出しそうになった。まつげが長くて二重、色白だった。

「すんません」

父親は頭を下げた。直子はふらついた。血管がいっぺんに広がって血圧が急降下するのが分かった。しゃがみ込みそうになるのを懸命にこらえた。

「昨日の晩帰ったら、正がこの顔ですわ。旦那が何をしたんか一目瞭然ですわ。私、ごっつい怒ったんです。警察へ突き出すいうて。まだ自分の子やと思ってへんから、そんなことができるんやって。そしたら泣いて謝るんですわ。『悪かった。とっさに手が出てしもたんや。もう二度とせえへん』言うて。それで私も泣いてしもうて……」

昨日のことを思い出した母親が泣き出した。それを見て正と妹と父親も泣き出した。直子も泣いてしまった。

「先生。ここまで来てもらってありがとうございました。この人、気が弱いから『先生が来たらどないしよう、どないしよう』言うて、こんなこけおどしの格好しよったんです。それにしても河上先生、何でそんなに強いんですか。いっこも怯まへんし」

直子は涙を拭きながら答えた。

「私もお父さんと同じなんです。私は一歳のときに両親を震災で亡くしたんです。私だけ奇跡的に助けられて祖父母に育てられました。そやから、子どもが悲しむのは見てられへんのです。ちゃんとお父さんとお母さんが居て、家庭があるんやったら、けんかせんと仲良う暮らして欲しいんです。私はお父さんを知りませんけど、お父さんいうたら大きくて優しい存在や思うんです。暴力なんて、もってのほかなんです。私は祖父母に大事に

育てられましたけど、何か違うんです。そやから、子ども大事に、家族も大事にしてほしいんです。その一念だけで今日もここへ来ました。えらいきついことばっかり言うてすみませんでした」

直子はそれだけ言うと声を上げて泣いてしまった。正がティッシュの箱を渡してくれた。

「こんなことしてえらいすみませんでした。これからもこいつのことよろしくお願いします。悪かったら、なんぼ叩いてもよろしいさかい」

父親が泣きながら言った。

「何言うてますのん。先生が叩いたら余計にあきませんやんか」

直子も泣きながら言った。笑いが沸いた。それを潮に、直子は一声かけて団地を後にした。

「お母さん、私も新任なので、どうやって指導して良いか分からないときの方が多いんです。お父さんとお母さんもいっしょでしょう。教育のことで困られたら、まず私に相談してください。いっしょに考えて良い方法を探しましょう」

「はい。先生の気持ちよう分かりましたから、何を置いても先生に相談します。」

父親の声が直子の背中をシャンとさせた。

その日の放課後、久しぶりに五時ごろ学校を出た。外はまだずいぶん明るかった。久しぶりに、あの公園へ行ってみようと思った。

高校生になって、初めて祖母に連れて行かれた公園。灘の駅を下りて十五分。大きなビルの隣。直子たち、親子三人で住んでいた家の跡は公園になっていた。

あの朝、倒壊した家の中から直子だけが助け出された。直子は飛び回るヘリの音に負けないくらい力強い声で泣いていた。太い柱と梁(はり)を頭や背中に受け絶命した父母の間で。二人に「生きて」と守られるように。

近所の人が泣き声を聞きつけて、消防の手を借りずに助け出してくれた。直子は大勢の人の手から手へと渡って冬空の下に現れた。

祖父母が加古川からたどり着いたのは暗くなってからだった。単車で二号線をひた走ったのだ。倒壊した家の近くの避難所を軒並み回ってやっと探し当てたとき、直子は近所の人に食べ物をもらい、すやすやと眠っていた。

祖父母の落胆は隠しようもなかったが泣いてばかりはいられないと、直子を引き取り単車に乗った。単車の後ろで祖母に背負われて眠る直子を、近所の人たちは希望の光だと言った。「大きくなれ」「がんばれ」と送り出された。

祖父母は、いつも「ありがたいことやった」と言ってこの話を閉じた。

何度も何度も、この話を聞かされて育った直子は、何としても生きなければならないと思うようになった。生きて人の役に立つ人にならなければと。まだ、生きることの意味さえ分からない小さなころから。

直子は公園にあるブランコに揺られながら、自分が希望の光だと言われた意味を考えた。

上を向くと高いマンションが目に入った。今しも灯りがともりだしたあの窓のひとつひとつに、人は住み、泣いたり笑ったりしている。

どんな裏通りに入っても、もう震災の爪痕は見あたらない。人も戻ってきた。だが、現実に震災はあった。そして、体験した人々の心に深く刻まれた苦しみや悲しみは、決して褪せることはない。まだまだ、正や裕太の親のように迷っている人も多い。

あのとき、自分を助けるために手をさしのべてくれた近所のおばちゃんやおじちゃんたちの家も、きっと壊れていたことだろう。親、兄弟、子どもが亡くなった人もいたかも知れない。なのに自分は助け出された。「生きろ」「がんばれ」と励まされた。

絶望の淵に居ても、いや絶望の淵に居たからこそ、人々は真心の手をさしのべた。自分たちの生きる希望を見つけるように。

直子の迷いは晴れた。

前を向いて毎日を生きていこう。これからは、自分が希望の光となり、迷っている親や子どもたちの心に真心の灯りをともす番だ。

「河上直子、二十二歳、新任。ちょっとええ仕事しまっせ」

直子は勢いよくブランコをこいで飛び下りた。

いつもより歩幅を広くし、胸を張って歩き出した。

次の日の朝。

直子は勢いよく教室の戸を開けた。正の姿を探した。居た。いつもの席にいつものように。目の周りの色が昨日より薄くなっていた。元気に隣の子と話をしている。

「よっしゃ」

直子は右手で拳を作って、気合いを入れた。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

小説部門

いま、伝えたいことがある。

織田　香音

1

あやちゃんはかっこいい。かしこくて、美人で、運動もできて……。それに、思った事をはっきり言える。男子にも負けない。私はあやちゃんとは正反対で、勉強ができるわけでもないし、顔も普通だし、とろいうえに思ったことが素直に言えない。

あやちゃんと出会ったのは、幼稚園の頃だった。年長組のときに引っ越してきた私は、男の子からいじめられていた。

「じゃま！　おまえ、とろいんだよ！　あっちいってろ、ばか！」

そう言って男の子は殴ってきた。

「や、やめて。いたいよ…」

抵抗にもなっていなかった。

「やめなよ！」

さっそうと現れたヒーロー。それがあやちゃんだった。

「こいつがとろいのがわるいんだろ！」

「ひとのせいにして、ばかはおまえだ！」

そして始まる乱闘。あやちゃんのほうが優勢だったが、ほかの子が知らせたのか、二人は飛んできた先生に止められてしまった。先生に叱られているあいだも、あやちゃんは堂々としていた。そんなあやちゃんが、私には輝いて見えた。

それから私たちは、ずっと一緒だった。小さな町の小さな学校に通っていたから、クラスが離れることもなかった。いつしか、お互いにかけがえのない親友だと認めあってい

た。

2

「んんー。あ、朝か」

あやちゃんと出会ったころの夢をみていた。とても懐かしい記憶だ。

「今何時…って、ええ!?」

枕もとのデジタル時計がうつす時刻は、七時半。アナログならまだしも、デジタル時計で見間違えることなんて、そうそうない。

「ちょ、ママ！　なんで起こしてくれなかったの?」

急いでランドセルを引っかけて、リビングへ下りる。

「だってあんた、何回言っても返事しかしなかったじゃない。自業自得よ」

どうせ遅くまで起きてたんでしょ、とすました顔で言うママ。反論したいけどそんなことをしている時間はない。パンを口につっこんで家を飛び出した。

キーンコーンカーンコーン。着席のチャイムがなった。必死で席にすべりこむ。

「あ、ひな。遅かったじゃん。まさか寝坊でもした?」

あやちゃんが振り返って、いたずらっぽく言った。

「あはは。そのまさかなんだよねぇ……」

私は力なく笑う。

「もー、ひなは仕方ないなあ。中学生になったらどうするのよ。ほんと、あたしがいないとだめなんだから、もっと……」

あやちゃんが言い終わる前に、ガラガラと前のドアが開いた。

「はい、朝の会始めますよー。西本さん、おしゃべりは休み時間にしてくださいね」

担任の先生が黒板の前に立つ。

「じゃあ、日番の人、あいさつお願いします」

「起立。朝のあいさつをします。おはようございます」

「おはようございます」

礼をしたとき、あやちゃんがやっちゃったと言うように舌をペロッとだした。

3

「ひな、帰ろ！」
帰りのあいさつが終わったとたん、あやちゃんがかけよってきた。
「うん、ちょっと待ってて。絵の具セットとか持って帰るから」
「へえー、まじめだね。あたしはテキトーに終わらせちゃったよ」
今日は、図工で描いた絵を家に持って帰って仕上げるつもりだ。
「絵描くの、好きだから」
「すごいなあ。あたし、これが好き！　ってものがないからさ、うらやましい」
あやちゃんはそう言うけど、私だってあやちゃんがうらやましい。
「はい、準備オッケー」
「よーし！じゃあ、帰ろー帰ろー！」
能天気なあやちゃんの後をついて、教室をでた。

いつもの交差点で
「ランドセル置いたら東町公園集合ねー。みうとかおりも来る予定だから」
「はーい。じゃあ、あとでね」
と言って別れた。
（お菓子と、ペンケースと、ノートと…）
持っていくものを思い浮かべながら、家に入る。今日は、なにして遊ぼうかな。
（早くいこっと）

公園に着くと、みうちゃんとかおりちゃんがブランコに乗っていた。
「あ、ひなー　やっほー」
「あやちゃんは？」
「まだ来てない」
めずらしいな。あやちゃん、遊ぶときはいつも一番にいるのに。

「ねえ、あやが来るまで暇だからさ、ちょっとイタズラしない？」
突然、みうちゃんがニヤニヤしながら言った。
「イタズラって、なにするの？　あんまりひどいことはやめといたほうがいいよ」
そういうかおりちゃんも顔は笑っている。
「そうだなあ……。ピンポンダッシュとか？」
「や、やめとこうよ、そんなこと。後で先生に怒られるかもしれないし。その前に、あやちゃんが怒るよ」
止めようとしたが、それが余計に二人の気にさわったようだ。
「ああ、あや？　あの子、ちょっと調子乗ってるよね。いつも良い子ちゃんぶってさ」
「分かるー。思ったことすぐ言うし。空気よめっつの」
思わぬ反応に、動揺する。
「え？　みうちゃんもかおりちゃんも、どうしたの？　あやちゃんと仲良かったんじゃないの？」
なんなのだろう、この空気は。
「誰があんな子と仲良くするの？　みんなに嫌われてるよ？　気づいてなかったんだ？」
「でもさ、正直ひなもそう思ってんじゃないの？　あやが調子乗ってるって」
「そんなこと……」
ハッとして二人の顔を見る。ここで逆らったら明日からどんなあつかいを受けるかは、火を見るよりも明らかだ。
「う、うん……。そうだね……」
自分が、情けないと思った。本当はそんなこと、全く思ってないのに。
「ひな……」
突然名前を呼ばれて声のした方をむくと、そこにはあやちゃんが立っていた。
「あ、あやちゃん……」
「それ、本当……」
言われてから、自分のしたことの重大さに

気づいた。
「ちっ、違うの！　これは……」
「そうらしいよ。ひな、いつも一緒にいたくせに、あやのこと嫌いなんだって」
勝手に、みうちゃんが言ってしまう。
「あやちゃん、ちが……」
「言い訳なんか聞きたくない！」
強い言葉に、私は黙ってしまう。あやちゃんは公園を出て行く。その背中を追いかけることが、怖い。

「卑怯だね、あんた」

あやちゃんがつぶやいた言葉は、私の胸に深く突き刺さった。
（私が傷つく資格なんて、ないのに）
そうだ。私よりもあやちゃんのほうが、ずっと傷ついているはずなのに。泣きたいのに、涙が出てこなかった。
（昔はすぐに謝れてたのにな…）

今は、その背中を追いかけることさえ、できない。
「あーあ、行っちゃったー」
かおりちゃんが他人事のように言った。私の中で、何かが〝ぷつん〟と音をたてた。
「帰る」
それでも二人に強く言えない私は、あやちゃんの言う通り卑怯だと思った。
夕食のとき、どうしても食欲がわかない私をママは心配したが、「ごちそうさま」とだけ言って部屋にあがった。
『卑怯だね』
あやちゃんの言葉が頭のなかで、ぐるぐる回る。卑怯だね、卑怯だね、卑怯だね卑怯だね卑怯だね卑怯だね卑怯卑怯卑怯卑怯卑怯卑怯ひきょうひきょうヒキョウヒキョウヒキョウ……。
（もしかしたら、今までずっとそう思ってたのかな）
思い出せば、守ってもらうばかりで、私は

あやちゃんになにもしてあげられていない。どす黒い気持ちが、心の中を流れる。
「あやちゃん、私のこと嫌いになったよね」
言葉はむなしく響き、なぜか悲しい。
そのまま、眠りについてしまった。

4

翌朝。起き上がろうとしたら、頭がガンガンして、気分が悪かった。熱を測ってもらうと、三十七度五分あった。
「学校に休みますって連絡しとくね」
ママの言葉を聞いて少しほっとしてしまった。本当に痛いのは頭じゃなくて、心だった。

5

熱も下がり、翌日には体調ももとに戻っていた。
ガラガラッ。教室に入るとなにか違和感があった。
（あやちゃんの周りに人がいない…）
いつも人気者で常に人の輪のまんなかにいるあやちゃんは、どこか暗い表情をしていた。〈無視〉の二文字が浮かんだが、話しかけられる勇気もない私は、できるだけ気にしないようにした。
決定的な出来事は、お昼休みに起こった。
「ねえ、次って教室どこ？」
移動教室の場所を聞いたのだろう、あやちゃんがとなりの席の子に話しかけた。
（理科室だっけ）
心の中でつぶやくも、口に出されはしなかった。その子が答えるだろうから。
「あ、ゆいー！この前のさ…」
その子はさっさと席を立って、ほかの子のところに行く。後ろで、クスクスと笑い声がした。
（みうちゃん、かおりちゃん……）
私がいない間に、なにがあったのだろう。
「あやちゃ……」
「ひなー行こっ！」

話しかけようとしたら、みうちゃんが強引にうでを組んできた。
「え、でも……」
「嫌いなんでしょ？」
主語がなくても分かる。あやちゃんのことだ。みうちゃんの目は、余計なことをするなと語っていた。
（なんで、そんなことするの）
やっぱり口には出せない。こんな弱い自分は、あやちゃんのとなりにいる資格がない…。理科室に行きながら、また泣きそうになった。

それからあやちゃんは本格的にいじめられるようになった。説明しなくとも、典型的ないじめといえば、想像がつくのではないか。主にいろいろとやっていたのはみうちゃんとかおりちゃんだったが、ほかの女子たちも二人には逆らえず、徹底的に無視していた。
それから二週間くらいたったころ、一人の男子が声をかけてきた。
「井上。ちょっといいか」
「？」
東遼太（あずまりょうた）。私があやちゃんと出会ったときにあやちゃんと殴り合いをした男の子だ。ついて行くと、人気のない廊下の端で東くんは止まった。
「あのさ……。俺の思い違いだったら言ってほしいんだけど……」
真剣な表情の東くん。
「西本、いじめられてる？」
「今さら？」
思わず言ってしまった。
「二週間くらい続いてるのに気づかなかったの？」
「まあ、そうだけど…。てかお前、そんな当たり前みたいに言うなよ。親友がいじめられてるんだぞ？助けたいとか思わないのか？」
どうしてか、無性に腹が立った。
「別に。私には関係ないよ」
その瞬間、東くんの顔が引きつったのが

はっきりと見えた。
「お前…！　今まで西本がどれだけお前を助けたか、忘れたのかよ！」
いきなり肩をつかまれ、体がふるえた。
「いたっ！」
「わっ悪い。…お前、本当によく考えろよ。いずれ後悔することになるぞ」
上から目線で言われるのはしゃくにさわるけど、東くんが言っていることは正しい。
（私だって、今の私は嫌いだよ）
分かってる。分かっているんだ。東くんはきっと暗い表情をしているだろう。私は視線を合わせる勇気もなく、背をむけた。
次第に歩調が速くなる。ほんと、東くんは余計なことをしてくれたね。でも…
（ありがとう、東くん）
やっと目の前の霧が晴れたような気がした。

6

教室に戻ると、すぐに授業だった。私はあやちゃんと話をしようと思ったが、授業をさぼれるわけもなかったのでおとなしく席に着いた。
やっと授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。覚悟を決めて席を立つ。
「あやちゃ…」
しかし、私が話しかける前に、あやちゃんはみうちゃんとかおりちゃんに捉まった。
「あや～、昼ごはん一緒に食べようよ～」
「私、今日ね、あやのためにいいもの作ってきたんだ」
かおりちゃんが手に持っていたのは、牛乳パック。それを、ニヤニヤしながらみうちゃんとかおりちゃんはあやちゃんの前に突き出した。先生はおらず、クラスメイトも遠巻きに見ているだけだ。

「なに、これ」
「あやのために特別に作ったんだ〜」
「ほら、はやく飲みなよ」
（なに、してるの、二人とも）
信じられなかった。ちょっと前まではあんなに仲良く遊んでたのに…。
「よくそんな子どもみたいなことできるよね」
突然あやちゃんが小さく言った一言に、ざわざわとした教室は静まりかえった。それは、二人を怒らせるには十分だった。
「―っ！　あんたこそ調子にのってんじゃないわよ！」
あやちゃんの顔にみうちゃんの手が当たるその時。
バシッ！
「え…、ひな…？」
無意識のうちに、私はあやちゃんの前に立ちはだかっていた。
頬ににぶい痛みがはしる。次の瞬間、私は頭に血が上るのが分かった。
「二人とも…もうやめてよ…」
それでも強く言えない私は、やっぱり弱いんだろう。

7

それから先生がやってきて、私たちは五時間目のあいだ中、詳しく話を聞かれた。そのときに、あやちゃんへのいじめについても話した。最後のほうになるとみうちゃんとかおりちゃんは顔がグシャグシャになるくらい泣いていた。
でも、あやちゃんは最後まで背筋を伸ばして堂々としていた。横に座っていた私は、かっこいいなと思うと同時に、ホッとして涙がこぼれそうになった。
話が終わると、帰る時間だった。
「先生、さようなら！」

「西本さん、本当にごめんね。先生、気づいてあげられなくて」
「気にしないでください。先生が悪いんじゃないんですから」
「ありがとう。優しいね」
「いえいえ。じゃ、さようなら！」
「さようなら」
私は教室を出て行くあやちゃんの後を追った。
「あやちゃん！」
昇降口で声をかけた。あやちゃんは一瞬ビクッとしたが、ゆっくりとこちらを振り返った。
「ひな…」
逆光で表情がよく見えない。私が言葉を発する前に、あやちゃんはかけだした。
「あやちゃん！」
急いであやちゃんを追いかける。たぶんあやちゃんは私を許してはいないだろう。話をするのもいやかもしれない。
（でも、いま伝えなきゃ。私の気持ちを）

8

気がつけば、夕日が反射する川の横を走っていた。まぶしくて、目がくらむ。
ふいに、あやちゃんの姿が視界から消えた。
「！」
どうやら転んでしまったらしく、道路から外れた草むらの中で、あやちゃんはランドセルを背負ったままうずくまっていた。
「大丈夫？」
急いで携帯しているばんそうこうを出した。
「ひじ、出して」
私は赤くなっているあやちゃんのひじに、ばんそうこうをはった。
「これで大丈夫かな。あ、こっちもすりむいてる」
そう言って、残りのけがも手当てしていく。
「ありがと」

あやちゃんはそれだけ言ってそっぽを向いた。
「あやちゃん。そのまま聞いて」
一瞬抵抗するそぶりを見せたが、あきらめたように力が抜けたのが分かった。
「あのときは、本当にごめん。人の意見に流されて、思ってもいないこと言って。それに、あやちゃんがいじめられたときに知らないふりをして。親友なんて言ったくせに、裏切ってごめん。いつもあやちゃんに守ってもらうばかりで私からはなにもしてあげられなくて、ごめん。卑怯な私で、ごめん…」
いつの間にか、涙が音もなくこぼれて落ちていた。
「ごめんね…。ごめんね…」
最後には自分が何を言っているのかも分からなかった。
「もう、あやまらないで」
あやちゃんがポツリとこぼした。
「これ以上、あやまらないで。ひながあやまったらあたし、苦しくなるよ。私も、ひなの話も聞かずに決めつけちゃってごめん」
あやちゃんは頭を下げた。
「それに、あたしはひなにいろんなことをしてもらったよ。このばんそうこうだって」
「え？」
「あたしと一緒にいるようになってから、ひなはいつもばんそうこう持ってたでしょ？自分は使うこと少ないのに」
「あ……」
そういえば、と思い出す。私は日常的にばんそうこうを持ち歩いているけど、それはあやちゃんがけがしたときに助けられるようにと子供ながらに考えた結果だった。
「覚えてたの？」
「もちろん。大事な親友の気づかいだよ？忘れるわけないじゃん」
笑顔で言ってのけるあやちゃんには、一生かないそうにない。このまぶしい笑顔を見て安心したのか、私の目からは涙があふれた。

「あやちゃん」
「ん？」
「私、あやちゃんと出会えてよかった」
「あたしも、ひなと出会えてよかった」
夕日が私たちを照らす。やっと言いたいこと全部、言えた。
「これからも、親友でいてくれる？」
あやちゃんの問いに、私は迷わず答えた。
「もちろん！」

《優秀賞・一般の部》

随想部門

優しさをつないで

東森　美恵子

認知症カフェに、時々ボランティアスタッフとして参加している。

「認知症カフェを始めようと思う。ついては手伝ってほしい」と彼女から打ち明けられた時、返事に困った。それがどういうものか全く知らなかったし、認知症という言葉が重すぎた。

私の母は九十二歳になる。私を始め子どもたちは皆遠くに住んでいるため、長い間一人暮らしをしていた。ヘルパーさんに入ってもらう、配食弁当を頼む、デイサービスを利用するなどして、毎日誰かの目に触れるよう手配していた。それでも年月が経つうち、物忘れがひどくなり火の始末が危うくなってきた。こちらが良かれと思って言ったことに、すぐ怒りのスイッチが入ってしまう。そのうえ、あんなにおしゃべりだったのに、性格が変わったように口数が少なくなった。認知症だという。私は、ただオロオロするだけで、どう対応したら母のためになるのか分からなかった。そんな私が、カフェなど手伝うことができるのだろうか。

ひと月ぶりに帰省した時、世間話の続きで「認知症カフェを手伝って言われとるんじゃけーど、知らんことじゃけー、どうしようかと迷うとるんよ」と言うと、「何でもやってみんとわからんじゃろ」という答えが返ってきた。「ああ、これは元気なころの母の言葉だ」と嬉しくなった。母は、好奇心が強く何でもやってみようと思う人だった。

母の一言に背を押され、手伝うことを決め

た。それに私がお年寄りに関わっていれば、母も誰かに手を貸してもらえるかもしれないと心の隅で思ったりもした。

手伝い始めて分かったことは、認知症カフェと言ってもお客様はそんな人ばかりではないということだ。家人の介護をしている人、引きこもりの子供のいるお母さん、口うるさいご近所にへきえきしている人などなど。もちろん、ただのんびりした時間を過ごしに来る人も多い。

建物は、築百年以上の古民家だ。天井や床柱、太い梁、部屋の土壁、書院造りの床の間、広い縁側などのどこを見ても黒くすすけている。時の流れを色濃く感じさせるそれらが、ゆったりとした空間を作り出し、落ち着ける雰囲気を醸(かも)し出すのに一役かっている。

ふだんはおしゃべりな私だが、そこではなるべく人の話を聞くようにしている。相づちを打つだけにする。すると、話にひと区切りがついたころには、その人の表情が少し変わっているように思えてくる。プロではない私は、つい口を挟んでしまい後悔することもある。

それでも、カフェから帰られる時、「ああ、ゆっくりさせてもらったわ」と、笑顔で言われるとホッとする。「いい時間が過ごせたよ」という褒め言葉と勝手に思っているのだが。

そんな中で、毎週欠かさず来られるご夫婦と顔見知りになった。年の頃は六十代半ばだろうか。奥様は若年性アルツハイマー病だそうだ。同じ話を毎回何十回となくされる。実家のこと、兄弟のこと、若い頃の仕事の話とネタは尽きない。「えっ、その話、十分前に聞いたけど……」ということが多々ある。それでも、満面の笑みで話されると、「ふーん、それで……」と思わず身を乗り出さずにはいられない。

そんな奥様を「元気でおってくれたらええんですわ」と言いながら、ご主人はニコニコとこれまた笑顔で見守っておられる。

ある日、奥様がトイレに立たれたとき、「今日は朝から機嫌が悪うて、物を投げたりしましてなぁ。それでも、カフェに行くでと言うたら、ケロリとなおりましたんや」と打ち明け、「ここがあって、助かりますんや」と、真顔で付け加えられた。わずかな時間でも、夫婦それぞれが息抜きになって、そうしたらまた明日から心穏やかに過ごすことができると話された。家の中では、さまざまな葛藤があることだろう。それでも何もかも包み込んでみることのできるご主人のその優しさにホロリとさせられる。

また、いつもお昼前に来店される五十歳代の女性は、草笛の名手として数多くの場所でボランティア活動をされている闊達（かったつ）な人だ。彼女の娘さんは、ビーズ工芸が得意で、その作品は趣味の域を出ている。その娘さんが引きこもりになったのは二十歳過ぎ。会社勤めをしていたのだが、体調を崩して長期療養したのがきっかけだったそうだ。

「どうしても人の中に入ることができないと訴える子供の気持ちが、最初分からんでねぇ。近所の人の目も気になったし。親子で試行錯誤の取り組みをして、やっと今日までになったんよ」と話された。今でも、娘さんは外出することができない状態なのに、その顔は晴れやかだ。

ある日、「知り合いのシンガーソングライターが、私の詩に曲をつけてくれたんよ」とCDを持ってこられた。最初は義理で聞いていたのだが、曲が進んでいくうちに、胸が熱くなり涙があふれてきた。「哀しみや苦しみを越えた人のことばで　みんなが幸せになる」という詩だった。その内容にはそぐわないのに、なぜか突然母のことが頭に浮かび、母が私の子供のように思われて、愛おしくてまた涙が出た。

曲が終わった時、彼女は一言「ありがとう」と言い、私も「ありがとうございました」と言った。

優しさを水に例えると、その水が体の隅々まで沁(し)み渡って行く。カフェで癒(いや)されているのは、私達スタッフなのかも知れない。

ガラス戸の向こうに、この季節にはめずらしい時雨(しぐれ)が音もなく庭木を濡らすのが見える。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

随想部門

よりよい社会にするには

森本　紗英

夏休みのある日のことでした。妹が神戸の大きな病院に検査通院に行くことがあり、お母さんに、

「行ったら色んな経験できるから、いっしょに行こう」

と言われたので、私もいっしょに行くことにしました。

神戸の大きな病院に行くとき、電車とバスを乗りついで行きます。

そして私がバス停でバスを待っていると、バスがきて、止まりました。そしてバスに乗ろうとしたその時、バスがまるで地面にすいこまれるようにバスが下にしずみました。およそ十センチくらいしずみました。私はとてもびっくりしてパンクしてしまったのかなと思い、お母さんに、

「なんでバスがあんなにしずんだん？」

と聞くと、

「車いすの人や足が悪い高れい者のためにバスをひくくするんよ。みんなが、幸せに平等に生活できるように、社会が色々と少しずつ力をつくしているんやで。別にパンクしたわけちがうよ」

と教えてくれました。

私はその後、家に帰って、あのバスの他になにがあるのか考えました。

（そういえば、点字ブロックも目の不自由な人のためにあるなぁ。てすりもその内に入るし、あと駅で流れる発着時の音楽とかも、目の不自由な人にはありがたいだろうなぁ。あと、盲導犬が店などに入ってもいいところの

マークはよく見かけるし…。）

と、意外と考えてみると、けっこうくふうされているものがあります。

私は、こんなにたくさんのくふうされている社会になっているなんて気がつきませんでした。あのお母さんの「色んな経験ができるから…」の言葉の意味を、実感しました。一歩外にでてみたら、色んな人が安全で安心のできるどんな人でも住みよい社会をつくろうとしている人たちがたくさんいて、その人たちは、とってもすごいと思いました。

私は、これからは老人に席をゆずってあげたり、にんぷさんにはおもい荷物をもってあげたりして、よりよい社会に少しでも近づけることが大切だと思いました。

《優秀賞・一般の部》

詩部門

夕焼け

尾崎　順子

思い出は　夕焼け？
修学旅行の思い出だよ
首里城へは　行かなかったの
美ら海水族館は　よかっただろう
どこもあんまり覚えていないって？

J

きみは沖縄へ　夕焼けを見にいったの？
高台のきみの家なら
瀬戸内へ沈む夕陽が　よく見えるだろう
なのに
夕焼けが　きみの思い出？

わかってるやろう
おれが一人でどこへも行けへんってこと
車椅子に体を縛りつけて
家と　学校と　この施設を
来る日も来る日も　行ったり来たり
おれの見てきた夕焼けは
送迎車の遮光ガラスにうつる
いちまいの赤黒い空やったんや
夕焼けが
あんなにでっかくて
あんなに赤かったなんて
知らへんかったよ
真栄田岬のキャンプ場で
おれは夕焼けに
車椅子ごと染まっていったんや
おれは夕焼けに
車椅子ごと吸い込まれていったんや

修学旅行で　おれ
ほんまの夕焼け　はじめて見た

十五年かけて
最高の夕焼けに　出会ったんや

修学旅行の思い出は　夕焼け
わかったよ　J
それは…
きみらしくて　いいよなあ

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

詩　部　門

大丈夫のリボン

森本　宝乃実

私の心の中には〝大丈夫のリボン〟が何本か、しまってあるよ。

そのリボンをつかう時は友だちが泣いている時に心の中から、そっととり出して泣いている友だちにむすんであげるよ。

「どうしたの？大丈夫？」

そう言いながらうすいピンク色のリボンでやさしくむすんであげるよ。

そうすると友だちは泣きやんでニッコリわらうよ。

「うん。大丈夫」

よかった。よかった。一安心。

お父さんが、つかれている時は、うすい青色のリボンでむすんであげるよ。

「お仕ごとおつかれさま。大丈夫？」

そう言いながらうすい青色のリボンでやさしくむすんであげるよ。

そうするとお父さんはニッコリわらうよ。

「うん。大丈夫」

よかった。よかった。一安心。

教頭先生の書しゃのじゅぎょうの時は、朱色のリボンで私の心をギュッと強くむすぶよ。

「一文字、一文字きれいに書きましょう。」と教頭先生が言うよ。

「はい、出きました!!」

「はい、ごうかくです」

よかった。よかった。一安心。

おばぁちゃんがケガをしたよ。あら大へん!!

「大丈夫？大丈夫？」

すぐに心の中から、おばあちゃんのはだと同じ色のリボンを出してむすんであげるよ。
「早くなおりますように」
「大丈夫だよ。ありがとう」
沢山リボンを使ったから心のリボンが少なくなったよ。どうしよう。こまったよ。
「大丈夫。大丈夫」お母さんのこえがしたよ。人に親切にできるピンク色のリボンと優しい気持ちの青色のリボンを足してくれたよ。

《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

ごめんがいっぱいと、大きなありがとうが一つ

森園　順子

りつこは、自分のほっぺを思いっきりギュッとつねった。

「いたっ」

ほっぺをつねるのは、自分へのおしおきだ。

「また、あんな意地悪なこというてしもた」

りつこの両親は共働きで、朝食はいつもおばあちゃんと二人で食べる。それは、りつこが赤ちゃんのときからの習慣だった。

小学校へあがるまでは、おばあちゃんの送り迎えで保育園に通っていた。両親にも、保育園の先生にも、だからこういわれてきた。

「りっちゃんって、典型的なおばあちゃん子やね」

「典型的」がどういうことかわからなかったけれど、「おばあちゃん子」っていうならその通りだと、りつこは思っていた。

（わたし、おばあちゃんのこと大好きやもん）

けれど三年生になって、そんなりつこに変化が起こった。

このごろおばあちゃんを見てて、りつこはイライラしたり、むかついたりすることがよくある。

たとえばきのうのこと。

朝食に出された牛乳を見たときだ。

「わたし、牛乳はきらいっていうたやろ」

「りっちゃん、牛乳は栄養たっぷりやし、背だってのびるで」

りつこはクラスの女の子のなかで、前から二番目のおちびさんだ。

「お母さんやおばあちゃんが低いから、わたしも低いんや。牛乳飲んでも高なれへんわ」

りつこはすぐに（あっ、いいすぎた！）と思ったけれど、もうおそかった。
おばあちゃんのたれ目が、さらにたれ目になっている。いまにも泣き出しそうなたれ目になっている。
ごめんなさいって、素直にあやまればいいのに、そんなおばあちゃんを見て、りつこはよけいにイライラとむかつくのだ。
でも牛乳事件なんて、まだいいほうだ。
「おばあちゃんね、今朝は食欲ないから、りっちゃん好きでしょ。これ食べて」
おばあちゃんのお皿にのっかっている目玉焼きの黄身を、おはしでつまんでりつこのお皿にのっけてきたときには、さけびそうになった。
（やめてよ。あばあちゃんが使ってるおはしでさわった黄身なんて）
「いらん。わたし、もうお腹いっぱいや」
ほんとうは大好物の黄身だから、りつこはお腹がいっぱいでも二つなんてかるく食べられるのに。
それだけじゃない。
おばあちゃんが食事をすませたあとで、つまようじで歯をつんつんそうじしているのを見ると、りつこはおえっとなる。
シュンと鼻水をかんだあと、そのティシュペーパーをおりたたんでまた使うおばあちゃんを見ると、りつこはおえっ、おえっとなる。
そんな自分をいやな子やと、りつこはそのたび自己嫌悪におちいるのだ。
夕飯のときだった。
「りっちゃんのクラスに、まさこちゃんって子がいるでしょ」
お母さんがいった。
「うん」
「あの子、お母さんと二人でくらしてるんだってね」
「そうみたいだけど」
りつこは、おばあちゃんをちらりと見た。
おばあちゃんは、お母さんの話なんて興味

ないわという顔をして、ごはんを食べていた。
おばあちゃんに友だちになったまさこちゃんを、りつこの家につれてきてもいいかときいたのは今朝のことだった。
「もちろん、いいよ。おばあちゃんお得意の、カップケーキを焼いておくわ」
おばあちゃんはそういってくれたのだ。
「まさこちゃんって、ませてるっていうか、大人みたいな口のききかたをするらしいわね」
「そうかなあ」
「よく駅前のスーパーで、夕方に半額になったお弁当を買ってるっていう話よ」
りつこはまさこちゃんからきいていた。
「お母さんね、がんばって働いてるから、わたし、ちょっとでも安いもの見つけて買い物するんだ」
りつこはまさこちゃんの話をきいて、すごいなって思った。えらいなって思った。
それなのに大人って、どうしてなにも知らないくせして、そんなことをいうんだろうと、りつこは悲しくなってしまった。
「そういやあ、むかしみつこの友だちに、よっちゃんっていう子がいたよね」
とつぜん、おばあちゃんがお母さんにいった。
「えっ、なに、いきなり……」
「たしかよっちゃんも、お母さんと二人ぐらしだったね」
「あら、そうだったかしら」
お母さんはきゅうにしどろもどろになった。
「ほら、しっかりものの良い子だったじゃないか。いい友だちができたって思ってたのに。けんかしたのか、いつのまにか遊ばなくなった」
「りっちゃん、宿題すんだの」
お母さんはまさこちゃんの話をやめて、りつこにぜんぜん関係ない話をふってきた。
りつこはおばあちゃんを見た。

おばあちゃんはにっこり笑っていた。
つぎの朝、朝食を食べているとき、りつこはおばあちゃんによっちゃんのことをきいてみた。
「ねえおばあちゃん、よっちゃんのこと教えて」
「りっちゃんのお母さんが、小学生のときの話だよ。友だちに、よっちゃんって子がいてね」
「それで」
「よっちゃんはお母さんと二人ぐらしだった」
「お母さんは友だちのよっちゃんのこと、忘れちゃったのかなあ」
「覚えていると思うよ」
「でも……」
「よっちゃんもね、まさこちゃんみたいに、大人の勝手なうわさをいっぱいいわれてたみたいだね」
「えっ」
「みつこは、そんなうわさに負けてしまったんじゃないかなあ」
「負けたってどういうこと」
「クラスの子が、よっちゃんをのけものにしてね。みつこはよっちゃんがいい子だとわかっていても、クラスのみんなには逆らえなかったんだと思う」
「おばあちゃんは、よっちゃんに会ったことがあるの」
「なんどか家に遊びにきたよ。きちんとあいさつのできる、しっかりした子だった」
「まさこちゃんもそうだよ」
おばあちゃんはりつこの顔を見て、にっこり笑った。
「きっとそうだと思う」
「まさこちゃん、家に遊びにきてもいいのかな」
「いっただろ、カップケーキ焼いておくって」
「お母さんはまさこちゃんのこと、よく思ってないよ」

「まさこちゃんはりっちゃんの友だちだろ。お母さんの友だちじゃないよ」
「おばあちゃん、ありがとう。きのうも、ありがとう」
「きのうって、さてさてなんのことかな」
りつこはもっとちゃんと、おばあちゃんにお礼がいいたかった。
まさこちゃんのうわさ話をするお母さんを止めてくれて、ありがとうっていいたかった。
「よっちゃんをね、数年前に見かけたんだよ」
「どこで」
「おじいちゃんが救急車で運ばれた病院でね」
「えっ」
「あれは確かによっちゃんだったよ。みつこも気がついてたと思う」
「よっちゃんはなにしてたの」
「病院の師長さんだった」
「師長さんって?」
「看護師さんの、リーダーっていうのかなあ。学校でいう委員長ってとこだね」
「すごい」
「テキパキ働いてた」
「おばあちゃん、いろいろごめん」
「なんだい、きゅうに」
「わたし、このごろおばあちゃんにいやなことばかりいってる」
「りっちゃん、いやなことはお腹にためずにいわなきゃあだめだよ」
「えーと、あのう……」
「ほらいってごらん」
りつこはお腹に力を入れ、深呼吸をした。
「おばあちゃんのおはしでつまんだものを、わたしのお皿にのっけないで!」
「つまようじで歯をつんつんそうじしないで!」
「ティシュペーパーは一回鼻水かんだら捨てて!」
りつこは早口で一気にいった。
そして「ごめんなさい」と頭をさげた。

「あらあら、こちらこそごめんよ。りっちゃん、よくいってくれたね。気をつけるからね」
「わたしのこと、きらいになったでしょ」
「とんでもない。大好きのままだよ」
「ほんと」
「さあさ、いそぎなさい。もう学校へ行く時間だよ」
「うわっ。ほんとだ」
「さあてと。カップケーキ、おいしく焼けるといいんだけど」
おばあちゃんのつぶやく声がした。

《優秀賞・学齢児童生徒の部》

創作童話部門

心の国のかけ橋

鈴木　聖生

「いってきまーす」

朝六時、いつも通りの時間。今日はパラパラと雨が降る中、赤色の傘をさして家を出た。そして、まだ慣れない中いつも通りの電車に乗り、いつもと同じ席につくと、ぬれた傘を束ねて横の手すりにかけた。

ふうっと一息ついてあたりを見回す…これだけ朝早くだと、車内のお客さんは、いつもと同じ決まったメンバーだ。新聞を熱心に読むおじさんに、イヤホンを耳にかけスマホをさわっているお姉さん。こっくり下を向いて寝ているお兄さんも。車内はしーんと静かで、電車の走行音だけが鳴り響く。そして、お客さん一人一人の心の『国』は、けっして同じ車内にいる他の人の『国』に立ち入らない。いろんな人の『国』どうしが仲良くしている…わけではなく、他の『国』を気にしていないようだ。全く知らんぷりするわけではないが、一歩『国』の外に出ようとすると足がすくむ。

そうこう考えている間にいつもの降車駅に着いた。空はすっかり晴れていた。

「この電車は、この駅までです。ご乗車、ありがとうございました」

広げていた参考書を閉じ、急いで荷物をまとめ、席を立った。他のお客さんも皆、忘れ物を確認しながらホームに降り、それぞれが一人一人目的地へ向かう。もちろん、心の『国』も忘れずに。

「これ、忘れていますよ」

トントンと肩をたたかれ、聞きなれない声

のした方に振り向くと、そこにはいつも同じ車両で変わらず一番すみの席に座っているおばさんが…その手には私の赤色の傘があった。

「あっ、私のです。ありがとうございます」

そう受け取ると、おばさんは私の顔…目ではなく、なぜかその下の鼻や口あたりをじっと見てから、にこっとした。

「本当にありがとうございます」

もう一度、行こうとするおばさんに丁寧にお礼を言うと、おばさんはすっと耳をかたむけ、また私の顔をじっと見てからにこっとした。そして、

「どういたしまして」

そう言い残して行ってしまった。一瞬心がほんわかした後、私の顔にハテナが飛んでいる。おばさんがふり返ったとき、ゆれた髪の間から耳元に何か白っぽいものがみえた。なんだろう?でも、あのおばさんはとても美しい『国』の持ち主だ。それは、はっきりとわかった。そして、これから、毎朝私とおばさんの心の国はそっとつながれるかも。すっかり晴れ渡った青空を赤色の傘と共にながめると、なんだかとてもわくわくした。

けれども翌日、おばさんはいなかった。その翌日も、そのまた翌日も…。

いつものおばさんの席は、いつのまにか、新学期から新たに加わったピチっとスーツを着こなす若いお兄さんの席になっていた。

あれからずいぶん時が経ち、もうすっかり長い電車通学にも慣れた。でも、あのおばさんには、あれからずっと、一度も会えていない。

今日もその電車にゆられていた。いつもの終点に着くと、ぎごちなかった車内から、人も、空気も、心の国も全てがなくなる…なくなっていなかった、今日だけは。青色の傘が一本。なんだかビビッとした。思い出すものがあった。私もあの時のおばさんのように心に美しい『国』をもつことができるだろうか。

いや、もちたい。この傘の持ち主は、確か…あの黄色いワンピースの人だ。傘を持って、その人を追いかけた。
「すみません。これ、ちがいますか」
声をかけたが反応がない。もう一度、真横から、大きい声で言い直した。
「すみませーん。これ、ちがいますか」
やっとその人は振り返った。が、首をかしげてきょとんとしている。
「ごめんなさい。人ちがいでした」
どうやらこの傘の持ち主ではなかったようなので、軽く頭を下げてその場から去ろうとした。
「待って」
ずいぶん久しぶりな感じがする声だ。振り返るとさっきの黄色いワンピースの人だった。
「それ、私の傘です」
青色の傘を指さしながら言った。
「そうですか。良かったです。どうぞ」
その人は私が話しているとき、じっと私の顔を見ていた。目線は下げて。まるであの時のおばさんのように。そして、にこっとして傘を受けとった。その時、ハッとした。まちがいないと思った。その人もにこにこしてこちらを見ている。そしてこう言った。
「どうもありがとう。またあなたに会えてうれしいわ」
「先程はごめんね。私、実は、生まれつき耳が悪くて…」
そう言いながら、耳元の白っぽいものを指さした。補聴器だ。
「一応、これしてるんだけど、これだけだとまだ少し聴こえづらくて…。私は手話も覚えたのだけど、手話を知らない人とはふつうにお話するしかないでしょ?そのときはいつも、相手の口の動きもみて、音を考えながらお話を聴くの。だから、後ろから話しかけられると、いつもなかなか気づけなくて。本当にごめんなさいね。傘を届けてくれたのが、

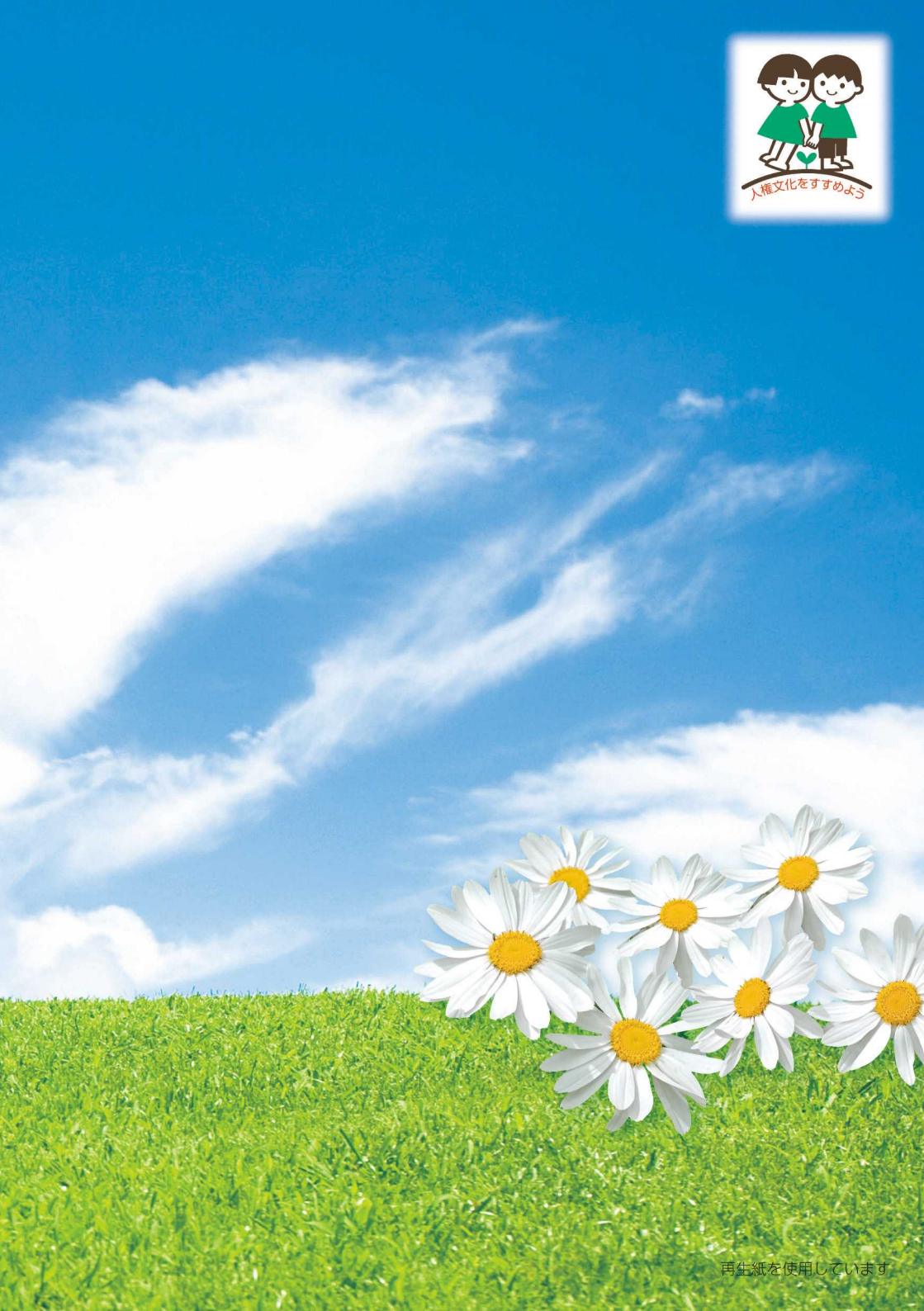
あなたで良かったわ。ありがとう」

もしかすると、私とおばさんの心の国はずっとつながっていたのかもしれない。私とおばさんだけではない。だれかとそのだれかを助けたいと思った人の心の国はいつもつながっている。私の赤色の傘とおばさんの…あの日みた空と同じ青色の傘。これらが心の国のかけ橋になった。

平成28年度　人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発　行　平成28年12月
編　集　公益財団法人兵庫県人権啓発協会
〒650-0003
神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内
TEL 078（242）5355
FAX 078（242）5360
発行者　兵　庫　県
公益財団法人兵庫県人権啓発協会
印　刷　㈱興正社


人権文化をすすめよう
再生紙を使用しています